

探求 スペイン世界遺産都市



アルカラ・デ・エナレス
アビラ
バエサ
カセレス
コルドバ
クエンカ
イビサ/エイビッサ
メリダ

サラマンカ
サン・クリストバル・デ・ラ・ラグナ
サンティアゴ・デ・コンポステーラ
セゴビア
タラゴナ
トレド
ウベダ



**Ciudades
Patrimonio
de la Humanidad**

ESPAÑA | UNESCO

スペイン世界遺産都市グループ



都市 再発見

遺産、文化、芸術及び歴史はスペインの発展に欠かせないものである。スペインはユネスコに登録された世界遺産の最も多い国の一つなのである。

スペイン世界遺産指定都市機構は1993年、文化遺産の保護及び維持を目的として設立された非営利団体である。現在、アルカラ・デ・エナレス、アビラ、バエサ、カセレス、コルドバ、クエンカ、イビサ、メリダ、サラマンカ、サン・クリストバル・デ・ラ・ラグナ、サンティアゴ・デ・コンポステーラ、セゴビア、タラゴナ、トレド、ウベダの都市が加盟している。

遺産指定都市は推奨観光都市である。これらの都市は過去と現在とを結びつける歴史ある芸術や文化、グルメなど、価値ある多様なサービスを提供している。



Organización
de las Naciones Unidas
para la Educación,
la Ciencia y la Cultura



Patrimonio Mundial
en España





アルカラ・デ・ エナレス 再発見

春の清々しい空気のもと、
世界遺産という建築と歴史を象徴する石のある、
過去と現在をつなぐ空間と時間の中へ
あなたたちを誘いたいものだ。

ホセ・イエロ

アルカラ・デ・エナレス

※ 学問の都市



15世紀にシスネロス枢機卿はミゲル・デ・セルバンテスの出生地であるこの町を、理想的な大学都市にするための都市計画を立て、その建設を始めました。そして、それは現在においても観光の魅力の本質といえるでしょう。そして、1998年に世界遺産登録基準における基準を満たしたとみなされ世界遺産に登録されました。

思うよに言葉がすらすらと出てこない、あと少しでその言葉が出てきそうなようすで、片手にペンを持ち、考えている表情をしている。

ミゲル・デ・セルバンテスの銅像があり、彼の名前が広場の由来になっているプラサ・デ・セルバンテスは多くの通行人が行き交います。そして、セルバンテスは町の多くの人々に見つめられ、その広い長方形のスペースの混雑の上に立ち集中しようとしているように思われます。幼年期の普遍的な作家自身の体験には、1547年10月のとある日曜日、父親であるロドリゴ・デ・セルバンテスが生まれたての彼をサンタ・マリア・ラ・マジョール教会区へ洗礼式をす

るために連れて行ったことなどがあげられます。市民戦争の最中、生存者が広場に群がり続ける中、その群衆をかき分け『瀉血師の外科医』と布に包まれた新生児はその教会の塔へと辿り着きました。このセルバンテス広場は中世時代から市場として多忙に栄えた場所を拡大してつくられました。また、今日は栗の木、庭園、カフェテリアとそのテラス、近代的な野外音楽場を備えた、安らぎを

“訪問者がその広さに感嘆し凝視するほど印象的な大きさのこの広場には、常に、町の魂が宿っている”



“マジョール通りはフェスタでとても賑わいます。(…)ユダヤ人地区の主要ルートだったところからの精神が維持されていたため、メイン通りの生活を再現することはさほど困難なものではありませんでした”

与える遊歩道となっています。訪問者がその広さに感嘆し凝視するほど印象的な大きさのこの広場には、常に、町の魂が宿っているように思われます。またそこは、冷静沈着な雰囲気を漂わせる市庁舎と広場の側面に位置する時計台の空気が混ざり合うという、すべてにおいての中心

地であります。余暇の時間を少し中断し、偉大な長方形の広場のなかに留まる。そうすることによって全てが穏やかに感じられることでしょう。セルバンテス広場は、現在も数世紀前と同様にフェスタや公演などの舞台となっています。また、スペインの劇場の中で最も古い真の劇場のひ



“スペインの劇場の中で最も古い真の劇場のひとつである喜劇劇場が...”

とつである喜劇劇場が丹精込めて修復され、市民の生活と娯楽が戻ってきました。

マジョール通りはフェスタでとても賑わいます。そして、その通り沿いにはセルバンテスの生家があり、その生家も同様に修復され、作家の世界を再現している素晴らしいアイ>



※セルバンテスの世界

2006年に設立されたこのセンターは、その名前でも分かるように、『ドン・キホーテ』の400周年を記念して建てられました。オールドとアンテサナの小礼拝堂の双方はサンタ・マリア・ラ・マジョール教会の破壊によって被害を受けた残存です。また、この偉大な作家が洗礼を受けた聖水盤と1547年10月9日付けの彼の出生証明書はアルカラ出身の作家の存在とその作品を再現する要素となっています。そして、ここでは訪問者が彼の住んでいた世界と環境に少しでも近づけるための提案に努力をしています。このセンターでは、キホーテの重要なエディションのコレクションを考慮しています。また、同時にいくつもの言語で貴重なエディションが公開されています。時期ごとの展示会については、フォンドス・セルバンティノスと市役所の継続的な一連の催し物を通して決められます。また同時に、現在活躍している作家の作品の展示もしています。アンテサナ小礼拝堂では毎年セルバンテス賞に輝いた作家の作品に関する展示会を開催しています。



セントロ・デ・インテルプレタシオン
セルバンテスの世界
(セルバンテス広場 +34 918 771 930
www.promocionalcala.es)
入場無料 開館時間:(月曜休館)
火曜日から日曜日まで
冬時間11.00~14.00 / 17.00~20.00
夏時間10.30~13.30 / 18.00~21.00



ディアだといえます。またそこは、ユダヤ人地区の主要ルートだったところからの精神が維持されていたため、メイン通りの生活を再現することはさほど困難なものではありませんでした。そして、そこには粗石積みとカスティージャ地方に多くみられる化粧漆喰仕上げ、高貴なアーケードなど、様々な時代の建築物がみられます。

セルバンテスの生家では、ただミゲルとその兄弟たちが、当時は木で作られていた柱の間を遊び回っている姿、そしてアンテサナの病院で任務をしていたといわれている父親に子供たちが挨拶をする姿を想像するだけで当時の様子

“ロドリゴ・ヒル・デ・オンタニョンのルネッサンスの細心でエレガンスなデザインを施されたサン・イルデフォンソ学校のファースードは...”

が蘇ってきます。また、それはマジョール通りの一部である建物によっても証言されています。ムデハル様式のインスピレーションを受けて構築された土台は15世紀からの蓄積で、カスティージャ風木製ギャラリーでできたパティオは癒しのオアシスであり、また病人に食事を作ることと交換に、サン・イグナシオ・デ・ロジョラが使用していたという部屋を覗くことができます。

アルカラで勉強した1526年から1527年の学期は日々の糧でありました。15世紀末にシスネロス枢機卿



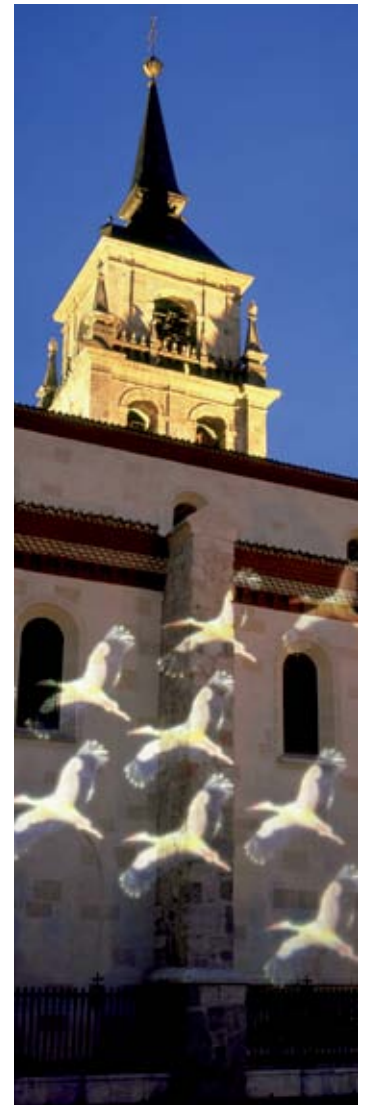
により活気づけられた当時の最新の教育機関はとても興奮させられるもので、それと同時に、農業都市としての特色は常に変えてしまいたいもののひとつでもありました。古代ローマ時代にコンブルトゥムと称され、その後アラビア語でアル・カラ・ナハル(エナレスの城)へと変換。更にその後、征服に加えて、ブルゴ・デ・サントィウスデ・トレドの大司教に与えられました。シスネロス枢機卿が”大学都市”を考案したとき、それはとても遠い出来事のように思われました。というのも、当時においてはあまりにも具体的で斬新な都市計画だったからです。サラマンカやセゴビアのカテドラルの製作者であるロドリゴ・ヒル・デ・オンタニョンのルネッサンス様式の細心でエレガンスなデザインを施されたサン・イルデフォンソ学校のファースードは壮麗な外観かのようにそびえ立っています。今、出ていくのはケバードですか。今、入ってくる人はカルデロン・デ・ラ・バルカですか。

アントニオ・デ・ネブリハ、フライ・ルイス・デ・レオン、サン・ファン・デ・ラ・クルス、マテオ・アレマン、ホベジャノス、ウナムノ...それは誰である可能性もあるのです。16、17世紀の並外れた文学と哲学の前進と本質、サン・イルデフォンソの門はまだまだ敷居の高い門であります。その門をくぐり、非常に古い講堂にたどり着く

“一目みただけで時代を超越して魅了されるカテドラルは...”



者は、セルバンテス賞を受賞またはそれに出席するに値する人といえます。哲学者で三ヶ国語を話すサント・トマス・デ・ビジャヌエバの静かなパティオと枢機卿によって考案されたすべての大学と知識の理想社会に委ねられる成果。数多くある大学のあるひとつに入ることで著名人の一人になれる可能性があるかもしれません。また、建築的に最大の存在



を持つ大学には、ヘスイータス、レイ、トリナリオス、マラガ、カラクシオロス、ドミニコスがあげられます。しかし、とても控えめにみえる大学入った場合でも、現在においては予想外の結果がでることがあります。例えば、シスネロスが1513年に創立したコレヒオ・メノール・サンタ・カタリナの物理学部がそのひとつです。

今日、マドリードのこだまのように拡張された町は常に動いていま





“保存されている城壁と野外彫刻博物館のインスピレーションを用いることで現在のパス庭園にもこれと同じことを願っています。”

す。また、東ヨーロッパからの他言語の影響を受けたことも確かです。そして、それはカステージャ語の生きた学問が育まれる地に絶え間ない影響を与えてきました。通りの上から下まで学校、本屋、文房具屋といった現在の商店が立ち並ぶ正面にはクラリス、ウルスラス、ファン、ベルナルダ、サン・フェリペ・ネリ小礼拝堂のような過去が詰め込まれた建物が立ち並んでいます。旧サン・ファン・デ・ラ・ペニテンシア修道院教会のラ・カサ・デ・ラ・エントレビスタで行われている展示会へ出向いてみるのもいいでしょう。この名前の由来は、カトリック両王とクリストバル・コロンが大司教館近くで開かれた第一回会合の敬意を表したことからつけられました。更に多くの古い歴史的建物が今日もそのまま継続されるように再転換されています。例えば、ラレド宮殿は19世紀の近代ムデハル様式の建物ですが、現在はシスネアーノ研究センターとして使われています。

ケバードとウナムノは非常に内容の濃い考えが好きで、二人とも考えながら岩の間を歩き回ったことでしょう。そして、拡張した歴史のめまぐるしさに直面する人生についての逆

上の思想はアルカラ・デ・エナレスの所々から生じています。ローマ時代の情景を残すモザイクのイポリトゥスの家、絶滅危機にあるイスラム教徒の城アルカラ・デ・ビエハ、何世紀にも渡る歴史を持つ城壁と門は努力の結果守ることができた賜物といえます。そして、保存されている城壁と野外彫刻博物館のインスピレーションを用いることで現在のパス庭園にもこれと同じことを願っています。サン・ベルナルド修道院の上質のバロック様式の建物にあるシトー会の博物館には高価な作品が収容されています。また、歩行者用に舗装されたビクトリア通りの静けさ越しには控えめで上品なラ・カサ・デ・ロス・リサナが隣接しています。

一目みただけで時代を超越して魅了されるカテドラルは唯一“magistral(優秀な)”という格付けがされていて、この辺りではフランドルの町にあるロバイナのサン・ペドロ教会もそのひとつです。またカテドラルではアルカラの大学の講師でないとなれなかったという司教座聖堂参事会員を決めていました。

そして、セルバンテス一家がしたように、マジョール通りを歩いて家路へと向います。

* アクセス:

アルカラ・デ・エナレスはマドリッドからおおよそ30KMに位置し、車での移動はA-2を使います。また、バスや電車での移動に関しても二都市間が円滑に結ばれています。

* インフォメーション:

www.turismoalcala.com

観光オフィス:

カジェホン・デ・サンタ・マリア, 1

Tel. +34 918 892 694

プラサ・デ・ロス・サントス・ニニョス

Tel. +34 918 810 634



アビラ 再発見

アビラ、(...)スペインの中で最も空に近い首都、そこは極めて小さい、穏やかな城塞の町、上品で、静かで、高貴なそしてひっそりとした町。アビラ、神秘と伝統、正直さと強情さ、忍耐、時間を越えた、そして曇りのない神秘的な秘密を打ち明けられる友の心に似ている。

カミロ・ホセ・セラ

アビラ

* 凸壁のある水平線



アビラの町を囲む精密で調和の取れた城塞は独特な影をつくりだします。そして、そこは護衛された、静かで暗的な世界をイメージさせます。また、同様にそれは町の他のモニュメントにも反映しています。そして、町の全てのインスピレーションが1985年に世界遺産登録獲得につながりました。

夜に着くと、2メートル半にも及ぶ周囲にライトがひとつそしてまたひとつと現れる、まるで古いアビラの城塞が白熱光を発する素材でできているようにみえてきます。それは永遠に輝き続ける光に違いないでしょう。そして、その城塞は12世紀から団結して変わることなく、その凸壁、頑



丈な塔そして巨大な花崗岩は威厳のある盾として時間と戦っています。

人間の命は限られている、しかし人間が作った作品はいつまでも耐えられる可能性を秘めています。この城塞のように不動にそびえたつ姿を見ると、その存在は理に合っているとしか思えません。建設された当時と変わることなく、またはそれ以上に生き生きとした88の塔、2500の銃眼間の凸壁、9つの門を目前にして、その思考は無意味にしか思えません。この城塞の建設に携わったキリスト教徒、ムーア人、ユダヤ教徒そしてイスラム教徒たちはスポットライトのかつてないほどの激しさで夜の城塞が昼間の城塞よりも増して輝くことなど想像もつかなかったでしょう。

スポットライトの点灯という『歴史的朝焼け』の奇跡の前に、空はまだ最後の光を保ち、山脈の頂上に雪を散りばめ、凸壁のある水平線の背景を整えました。それは混じりのない栄光そのものでした。クアトロ・ポステスそして、アイダ川に架かるローマ橋からの広範囲の眺めは朝焼けのようにキラキラと輝き、また月が霧の中に沈んでいくようにもみえとても美しい光景でした。そして今、夜中にそこを訪れ、歩き回り、その世界の中のすべてを知ったときの感情はさらに完璧で、満足のいくものでしょう。>

“スポットライトの点灯という『歴史的朝焼け』の奇跡の前に、空はまだ最後の光を保ち...”



* 精神の小道

この要塞の世界も門をくぐる前に、ここがサンタ・テレサの起源なのにご存知でしょうか。それは決して無駄な話ではなく、彼女の育った環境とインスピレーションを探求する話です。彼女の神に身を捧げる強さ、文学への信仰、私たちに信仰があるか、ないかに関わらず、彼女の人生の多くは尊敬に値します。彼女が天命を受けたのはどの通りであったとしてもおかしくありません。そして、その存在は証ごとに大きくなりました。彼女の生家は17世紀にオリバレス伯爵公の命令で建築されたバロック様式をインスピレーションしたラ・サンタ修道院教会です。そして、現在その地下礼拝堂は博物館となっています。彼女は強烈な人生の長い時間と経験をエンカルナシオン修道院で得ました。その修道院は市外にあり、またサント・トマス修道院へも告解しによく足を運んだそうです。彼女の初めての財団がサン・ホセ修道院に設立されました。



そして、そこでは控えめさと素朴さという彼女の考えを真の模範としています。エンカルナシオン修道院の聴罪師サン・ファン・デ・ラ・クルスと共にした時間も彼女の人生を理解するのに必要不可欠といえます。また、エンカルナシオン修道院には彼女が使っていた椅子と彼女の描いた十字架にかけられたイエスキリストの絵が保管されています。キリスト教徒と同様にユダヤ教徒も... マラベントウラの門の側には庭園があり、そこには同様にアビラに住んだモセ・デ・レオンによって書かれたカバラの重要な作品であるエスプレンドールの中のフレーズが再現されています。人々の精神はセントロ・デ・インテルプレタシオン・デ・ミスティカ (神秘主義文学センター) のテーマであり、ラストロ通りにある世界で唯一の神秘主義文学センターです。





“そして、無償で消えずに残るサン・ビセンテ大聖堂...”

なぜなら、初めは城塞だけの出会いであったものが、同時に何が何世紀の間守り続けられている理由かを知ることができるからです。

山のほうへ目を向け、アンブレスの溪谷を覗きこみ、通りや屋根や塔そして要塞の敷地内のうずくまった破風鐘楼の迷路を詳しく調べてみる。そんな穏やかな散策と城塞上部の通路の長さに魅了されている間にその中身は明らかになります。そして、アルカサールの門へと降りて行き、太古から市場や祭りに使われていたメルカド・グランデ(大きな市場)として最も知られるサンタ・テレサ広場を出ます。また、今日そこは舗装され、最も人気のある遊歩道として、バーやレストランが軒を並べます。ここでは緑の多い印象を常に受けることでしょう。美しいのモニュメント、100の逸話、毎日の生活のリズムと常に記憶に残る静寂さ。想像よりも本物を是非楽しんでください。

静けさと穏やかさの広がるその広場にはサン・ペドロ教会と忠実なロマネスク様式のからくりがあります。また、建築学上の構図で市外と市内は境界石によって区切られています。無償で消えずに残るサン・ビセンテ大聖堂、サン・アンドレス教会、サン・セグンド教会そしてサン・エステバン礼拝堂などには遠い時間との調和を感じます。

標高の高い、奥に秘められたそして静寂の中にあるアビラは建築物にはもってこいの場所といえます。城塞を保護した論拠は宗教的建造物にも続きました。しかし、「教会が多すぎる」との声はどこからも上がりませんでした。その理由には、それぞれの教会が町の観想的なシンフォニーとして調律された音と化していたからです。クエスタ・アンティグアを通り、盛大な雰囲気を通りを抜け

“...その修道院にはカトリック両王の一人息子であったドン・ファン王子が...”



“...壁を越しに並ぶラ・カサ・デ・カルニセリアは最も新しい観光オフィスで城塞への...”

エストラ・セニョーラ・デ・ラス・バカスに立ち寄り、その後サント・トーマス修道院へと向かいます。また、その修道院にはカトリック両王の一人息子であったドン・ファン王子が埋葬されています。その美しい回廊は王宮と調和されていました。そして現在では、東洋美術と自然科学という興味深い博物館となり、中国、フィリピンそして日本の作品を展示しています。マグダレナ教会、サン・フランシスコ教会、サンティアゴ教会、マルケス・デ・ラス・ナバス家、リセンシアド・パチェコ家、リセンシアド・マルドナド家、ベラダ宮殿、ロス・セラノス宮殿、バルデラバノス宮殿、エンカルナシオン修道院、サン・アントニオ修道院、ヌエストラ・セニョーラ・デ・ガルシア修道院などの寺院、修道院そして豪邸の一連から得るものは目に見えないもので、その瞬間や個人的体験が心に残ることでしょう。城塞のための世界はその城塞の中にあります。塔と塔を結ぶ城壁は異なった使命をもち建物を支えています。二つの四角い塔に護衛されたラストロの

門、婦人の愛の苦悩を連想させるバルコン・デ・ドニャ・ギオマールなどの物語はやむことを知りません。そして今日ではラストロ通りとなり多くの人が通行します。19世紀のファーサードとそれに対する思い入れはまだまだ使用に耐えるものでしたが、現在、ラストロ通りにファーサードはありません。

ロペス・ヌニェス通りにあるアギラ家が先祖の高貴な生活祈るように、レジェスの祭壇または、ペドロ・ベルグエテの祭壇の飾り壁を前に祈りを捧げても、アビラの精神は競争的な人々の論争に自由をあたえません。そのため、後世への先進を閉ざされた家柄の良い豪邸は精神的な強さを持ちます。そして、官僚関係など

“ベルドゥゴ宮殿は歴史的遺産局と世界遺産都市グループの本部が設置され...”





のオフィスとして、これらの建築物がその重要な命を延ばすことになりました。ベルドゥゴ宮殿には歴史的遺産局と世界遺産都市グループの本部が設置され、壁を隔てて並ぶラ・カサ・デ・カルニセリアは最も新しい観光オフィスが設けられ、城塞へのアクセスが可能です。また、ラ・カサ・デ・ロス・グスマネスとその塔は地方議会の本部が置かれています。ペルー初代副王の名を持つラ・カサ・デ・プラスコ・ヌエス・バレは地方裁判所になっています。プラテレスク様式の飾りが施されたポレンティーノスには陸軍公文書館の本部が設置されています。このようにして、古い建物の命は続いていきます。

時間と動向は移り変わり、過去に存在した人々がいます。15世紀のスペインの歴史を除きアビラには多くのユダヤ人がいました。サン・セグンドのなめし皮工場の残部をみると、すべきことに対して忠実だったユダヤ人が記憶に蘇ります。旧ユダヤ人街はマラベントゥーラの門まで広がり、現在も、ポシージョ通りに、ひとつの芸術作品のような雰囲気をかもしだ

しているレンガ造りのアーチとシナゴークの正門が残っています。もうひとつの記憶にヘブライ商人がいます。今日、レジェス・カトリコ通りがショッピングで賑わうのはそのことが理由といえるでしょう。そして、その通りにはいくつもの当時の住宅が残っているのがその証拠といえます。そして、常に町の中心部であるメルカド・チコ広場へとう移ります。官僚制度で様々な方針を決める市庁舎、そして毎日の市民の生活を活気付ける行事と伝統のための支援に努めています。

今では夜の暗闇にキラキラと輝き、いまだに多くが封じられている秘密はあるものの、すでに多くの人々に知られていること、そして、それ以上のものがこの城塞を守り続ける熱意になります。夜の暗闇に点されるライト。そしてそのライトに照らされるカルメンの門と旧カルメン修道院の鐘楼で構成された外観。現在、それは地方歴史公文書の中でも強調されています。隠れた要塞を軽く覗き込むこと、それは混じりけのない真髄の発見であります。

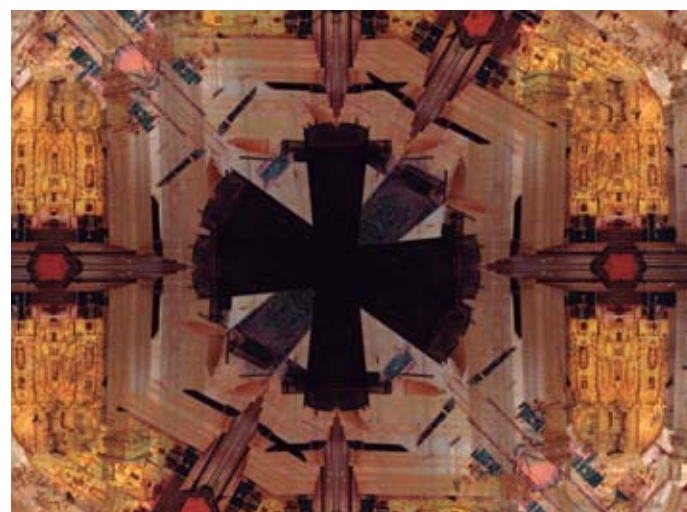
* アクセス:

アビラはマドリッドから100KM のところに位置します。車での移動の場合はA6からAP51に乗換えます。また飛行機はマドリッドのバラハス空港から一日一便のみ出航しています。首都からは電車 (www.renfe.es) またはバス (www.avanzabus.com) での移動が可能となっています。

* インフォメーション:

www.avilaturismo.com
www.avila.es
turismo@turismoavila.com

観光センター:
アベニダ・デ・マドリッド, 39
Tel. +34 920 225 969



バエサ 再発見

「アラブ人の町の古い城壁を背に私は一人ぽつんと孤独な午後を過ごす。

川は薄暗い農園と灰色のオリーブ畑の間を通り、そして陽気なバエサの土地を流れていく」

詩人 アントニオ・マチャド

バエサ

＊ルネサンスとマチャディアナ



アントニオ・マチャドはバエサに7年住んだ。

そして、この町はマチャドの影響を受け、マチャディアナに変わっていった。彼の詩集、『カスティーリヤの大地』は緑のオリーブ畑、アラブ、そしてキリスト教に変わっていった。「弓の曲線のように」と描写されたドゥエロ川、「壊れて散らばった三日月刀」のようになったグアダルキビル川。妻を失い傷つき「アンダルシアのサラマンカ」に着いたマチャドだったが、町は彼を迎え入れ、その後彼がバエサに残した影響は今日まで続いている。

バエサは類似の特色を持つ近隣の町ウベダと共に、世界遺産指定都市に加盟した。最後の加盟ではあったが、スペインの歴史や文化、及



び芸術において、素晴らしい結果をもたらせた。

町に位置するアルカサル（要塞）のセロからバエサの歴史を垣間見ることができる。先史時代、イベリア時代、ローマ時代、そしてイスラム時代の遺跡は長い間この町がいかにか重要だったかを物語っている。移り変わる文化を通して、この場所は地理的に防衛機能を果たし、伝達機能の要所として使われていた。カスティーリヤとアンダルシアの間に位置するこの町は中世において重要な軍事機能を果たした。バエサにはロマネスク後期の作品があるにも関わらず、訪問者は多くのルネサンス建築を前にしてその価値に気づくことが少ない。

サンタ・クルス教会、サン・ペドロ教会、サン・フアン教会、サン・サルバドール教会の正面玄関は13世紀後半のものである。サンタ・クルス教会はアンダルシアの中でも最も保存状態のよいロマネスク様式の教会である。一旦足を踏み入れると、まるでイスラム支配のアンダルシアが衰退し、キリスト教勢力がアラブ人によって支配されていた土地を奪回した時代に戻ったかのようなものである。天井には13世紀の壁画の一部がある他、ロマネスク様式の柱の上に伸びる尖ったアーチや、西ゴート時代のアーチを見ることができる。又、この教会はもともとキリスト教会であり、その後イスラム支配時代にはモサラベにより使用されたと想定されている。

商業と文化の融合。建築物や芸術に残された歴史の痕跡。キリスト教とイスラム教による建築様式の変化。



カテドラルの近くにあり、以前は無名の古い教会であったサン・ペドロだが、現在はその建築様式に注目を集めている。当時の半円形の部屋を残し、それらの建築様式は12世紀初頭のオニヤ修道院やウエルガス修道院、そしてシステル修道院に似ている。

一方、サン・フアン教会は建築当時のその優美な姿とは打って変わって、現在は廃墟と化している。カテドラルの近くに位置し、3つの身廊とドーム型の3つの後陣を持つ設計は司教宮殿の礼拝堂のようだとされているが、現在は全く残っていない。この教会はモスクの上に造られたが、1843年に閉ざされ、その後、厩舎、そして資材置き場に化した。

しかし、中世時代のバエサから離れる前に、ルネサンス建築でありながら、それ以前の様式を残しているカテドラルを見てみよう。宗教的特色のあるこの建物はもともとローマ時代



に多神教の教会として造られ、後にキリスト教会として再建築されたようだ。その後、イスラム教徒によってモスクが造られたが、すぐさま1147年にアルフォンソ7世によって再びキリスト教会となった。ムワッヒド朝はバエサの町を再び支配したが、最終

“かつて詩人ホルヘ・マンリケやガスパル・ベセラ、そしてマチャドが通ったバエサの通りや広場。これらはスペイン・ルネサンスにおけるこの町の繁栄と重要性を物語っている。”





的にフェルナンド3世によりキリスト教会として確立した。その時から16世紀までにかけて大きな変化を受け、現在見ることのできるロマネスク様式、ゴシック式及びムデハル様式を混合させたアルフォンソ式の教会が

できあがった。つまり、ここは過去において異なる宗教の教会であったとはいうものの、常に神々に接する場所だったのだ。

中世の城壁地区を訪れることなくして、バエサの代表的な中世建築散策を終わらせてはいけない。この地区は1477年、カトリック女王イサベルの「城壁を完全に破壊せよ」という命令から生き延びて現存する場所である。防衛壁の一部として町を囲んでいるのは、アラビア時代の城壁にある古いアリタレス塔、ウベダの門、バエサの門及びハエンの門。そしてコムネロスの反乱におけるカルロス1世の勝利を称えて造られたビジャラルのアーチである。

そして忘れてはいけないのが、15世紀に造られたハバルキント宮殿である。イサベル様式のすばらしいファサードを持ち、現在はアントニオ・マチャド国際大学の施設として利用されている。

“バエサが芸術の最盛期を迎えたのは16世紀であった。大学をはじめとして、新しい宗教的建築物が急増した。”



❖ 現存するルネサンス様式

かつて詩人ホルヘ・マンリケやガスパル・ベセラ、そしてマチャドが通ったバエサの通りや広場。これらはスペイン・ルネサンスにおけるこの町の繁栄と重要性を物語っている。カテドラルやサンタ・マリア広場を中心に、大学や旧神学校、旧イエズス会学校を楽しむことができる。

バエサが芸術の最盛期を迎えたのは16世紀であった。大学をはじめとして、新しい宗教的建築物が急増した。貴族階級、郷土、聖職者、学者や聖者、建築家、石工、画家や彫刻家、医者、音楽家や詩人はバエサの町に集まっていて、彼らの存在はこの町をスペイン南部における最も重要な町の一つにした。そしてその主導権はその後何世紀も続いたのである。

サンタ・マリア広場は、カテドラル、市庁舎、サンタ・マリアの泉、一風変わった宗教的文字が記載されているファサードを持つサン・フェリペ神

学校、そしてカテドラルの後ろに位置するルビン・デ・セバジョス邸など多くの建築物の中心に位置する。

その他にも、傑出した建築物が多数ある。例えば16世紀に牢獄として使われていたブラテレスコ様式の市役所やかつては精肉店や謁見の場として使われていたポプロ広場(別名ライオンの広場)、またカテドラルの改修を手がけたバンデルビラの作品とされているサン・フランシスコ修道院や前述したハバルキント宮殿のような多くの宮殿などがそれである。

バエサの町を一步進むごとに、宗教的又は市民社会の素晴らしい建築物を発見するだろう。その中でも公共広場のパセオ・デ・ラ・コンステイトゥシオン広場は、バルコン・デル・コンセホやアルオンディガのように回廊で飾られた点で際立っている。

町のほぼ全てが賞賛に値すべき場所であり、そのどれもが重要な過去を反映している。例えば、市役所にあるブラテレスコ様式のファサード





❁ “文化の移り変わりはバエサの美食文化に大きな足跡を残した。それは万能の調味料、オリーブオイルだ。古代ローマ、イスラム、ユダヤ、モリスコ、そしてムデハルの影響は年月をかけて融合し、オリーブオイルを作り上げた。”

ド、カテドラルの改修にも携わったアンドレス・デ・バンデルピラの傑作の一つであるサン・フランシスコ修道院、マグダレナ修道院、サン・パブロ教会、サン・イグナシオ教会、ゴシック・ムデハル様式のサンドバル教会、修復によってバロック時代のパイオルガンが再び鳴り響くようになったサン・アンドレス教会、そして貴族階級の宮殿や家などがある。

❁ オリーブ畑

文化の移り変わりはバエサの美食文化に大きな足跡を残した。それは万能の調味料、オリーブオイルだ。古代ローマ、イスラム、ユダヤ、モリスコ、そしてムデハルの影響は年月をかけて融合し、オリーブオイルを作り上げた。宗教的情熱とも言えるであろうオリーブを圧搾加工したエキストラ・バージン・オイルはこの土地の名

産物に指定されている。代表的な料理はロモ・デ・オルサ、アヒリ・モヒリ、バカラオ・ア・ラ・バエサナ、マサセイテ、アンドラホス、コシード・マレアド、ピピラナなどである。一方デザートでもピロロス、クルミのバターケーキ、トリハスやパホテスなどがある。これらの料理は味覚を大いに楽しませてくれる。

オリーブ畑を抜け、アシエンダ・ラ・ラグーナまで行ってみよう。プエンテ・デル・オビスポの近くにあり、町から8km離れているこの場所は価値ある建造物のカテゴリーとしてBICに登録されているオリーブ地帯で、オリーブ博物館がある。多様な文化の混在、ルネサンス様式の建築物、古代ローマ人時代から続く素晴らしいオリーブ畑、詩人マチャードが愛し、彼の影響を受けた町、それがバエサなのである。

スーバエサ駅から乗降できる。

❁ インフォメーション:

www.turismodeubeda.com
promocion@ubeda.es
Ayuntamiento de Úbeda
観光案内所
Plaza Vázquez de Molina, s/n
23400 Úbeda (Jaén)
Telf: 34 953 750 440 Ext:5



カセレス 再発見

かつては防衛に使われていた塔。
今日、それは美しい風景を鑑賞するために
そびえたっている。

リヒア・ボルゲス

カセレス

＊ 不朽の町



歴史が流れ、郊外が
現在との対立をして
いたあいだ、カセレス
の市壁の内側の世界は驚く
ほど不変の状態と保存されま
した。その見事な建築上の枠
組みが評価され、1986年に
世界遺産に登録されました。

なんとなく、何も考えずにマジョール
広場の夜の暗闇に落ちてみる。そこ
は夜の照明の光と陽気なざわめき
が溶けあいます。市庁舎が並びに
ある、白いファーサードに囲まれるこ
の長方形のスペースで起こる毎日の



人の行き来、そして今は夜を楽しむ
時間。テラスで時間が穏やかに流れ
るのを感じると、何もかもが重要で
ない気がしてきます。しかし、ブハコ
の塔の存在には一体どんな重要さ
があるのだろうか。銃眼と、その永遠
に続く記憶、完全で無傷、古い市壁
の町の石の迷路...カセレスでは歴史
的感動が魔法かのように実際に体
験できます。

ローマの切石の上にアラビア人が建
設した美しい城塞の塔をマジョール
広場から眺めてみる。こうして時代を
混ぜ合わせることで時間が踊り始
める、その移り変わりは純粹で、信じ
られないほどの魅力を持っています。
そして、すぐにブハコの塔の存在の
核心を直感的に感じるでしょう。そ
の銃眼は塔自身のプロフィールとも
いえ、異なった時代とそのインスピ
レーションが認められます。城壁内の
散策ですでにそれを感じることでし
ょう。そして城壁でできた夜に輝くカ
セレスに再び戻りたいと思うことで
しょう。18世紀、旧プエルタ・ヌエバに
取って変えたアルコ・デ・ラ・エスト
レージャ(星のアーチ)を抜けてもう
一度魔法と現実とに近づくために階段
を上る。夜と時間の影は紀元前25世
紀にルシオ・コルネリオ・バルボによ
って設立されたヌルベンシス・カエ
サリナ植民地を要塞化したローマの
石に隠れています。アドベの壁は12

“ローマの切石の
上にアラビア人が
建設した美しい城
塞の塔をマジョール広場か
ら眺めてみる。”



世紀にムワヒド朝の人々に建設さ
れ、その大部分は未だに残ってい
ます。アラブの栄光の時代は円筒状
の塔により明確にされています。カ
ルバハル宮殿とつながった古い城
の貯水池。現在はカサ・デ・ラス・ベ
レタスと統合されています。消えて
いく世界の鮮明な一場面の詳細を知
ることにより喜びはさらに増します。

狭い路地に深く入り込む、街灯の人
気のない光のもとファーサードや宮
殿の魅力は輝きます。昼間の散歩
を終えると、薄暗がりの謎の気配を
感じてきます。町がガリシア、アスト
urias、レオンの人々で再び繁殖し
た13世紀のレコンキスタ後の再出発
の瞬間、町の所有者はキリスト教徒
回復の所有者は変わりましたが、見事な
権力でその豪邸を要塞化しました。
最終的に宮殿は、ゴシック、ルネッ
サンス、バロック、新古典にリフォー
ムされ、調和されました。このころが
カセレスの歴史に残る永遠のカリ
スマ時代といえるでしょう。



“18世紀、旧プ
エルタ・ヌエバに
取って変えたア
ルコ・デ・ラ・エストレージャ
(星のアーチ)を抜けて...”



“しかし、ブハコ
の塔の存在には一体
どんな重要さがある
のだろうか...”

高いの要塞のような塔。イサベル女
王勲章の命令により取り壊されたも
のの、未だに高貴な建物のいくつか
が保存されています。町に滞在中
に、この町の貴族間に起きていた衝
突に終止符を打ちました。また、彼
女が邸宅を要塞化しなかったこと
により、多くの邸宅が守備的政策を
やめ、その時代の流行の装飾で邸宅
を飾りました。サンタ・マリア大聖堂
周辺ではこのようにして生まれた、
現在では貴重な邸宅が見受けられ
ます。またサンタ・マリア大聖堂は
ゴシック様式の外観をもつ花崗岩で
できた石造で、その広場にも同じ名
前がつけられています。寺院の荘
厳な存在感の前にも大きな邸宅は
身を隠すことをなくマジョール宮
殿は雄弁な外観でそこに建ちます。
その宮殿は細部まで満足の行届いた
ムデハル様式のパティオのあるゴ
シックとルネッサンス様式の建築
物です。また、カルバハル宮殿
にはルネッサンス様式のパティオ
があり、そこには100年物のイチ
ジクの木が生えています。また、
エビシコバル宮殿のファーサード
には浮き上げ装飾のアーチの土
台があります。ライトの明かり
がその影とその深さを伸

“アラブの栄光の時
代は円筒状の塔に
より明確にされています。カ
ルバハル宮殿とつながった
古い城の...”



ばすため、その詳細や紋章は夜間のほうがはっきりと見えます。

自然の光または人工の光で照らされていても、ゴルフィネス・デ・アバホ宮殿と構成されているその場所はとも印象的です。15世紀の要塞と16世紀の宮殿の建築の感じを混ぜ合わせた建築物は、より現実的に目に映ります。真直ぐそびえ立つ塔をみると、その生命力と権力について想像せずにはいられません。そして、その事実を想像するインスピレーションを与えてくれます。例えば、

❁ “自然の光または人工の光で照らされていても、ゴルフィネス・デ・アバホ宮殿と構成されているその場所は...”

大豪邸を邸宅としたカトリック両王は君主の戦士であったディエゴ・デ・カセレス・オバンド大尉に塔の建設を解禁しました。こうして、それは後世までサン・パブロ広場に残されること

* 起源の証言

カセレスの歴史的遺産は全ての時代の建築的傾向を代表しています。しかし、町やその周辺にも町の木の特徴が見られます。また、要塞の基礎となる石のほかにも、ローマ起源のものが多くあります。ピア・デ・ラ・プラタ(銀の道)としてよく知られる重要な言葉の一つ、またそれは歴史に残る町の入り口の主要門を代表するもので、クリスト・オ・プエルタ・デル・リオのアーチと呼ばれています。そしてそのアーチは1世紀に建設され、今日まで無傷で保存されています。同様にコレヒドールのアトリウムと呼ばれているフォロ・デ・ロス・バルボスもそうです。また、マジョール広場に隣接した場所には初めてのローマ防衛設備の門がひとつあります。1世紀の彫像はその場所の重要性を感じさせます。紀元前78年、カセレスの誕生53年前、ローマ人はカストラ・カエシリアと呼ばれるキャンプ地に定住していました。この遺物は20世紀始めに町から2キロほど離れたトレホン・エル・ルビオ街道町で発見されています。そして、その起源はさらに遠く、マールトラビエソの洞窟をみることでそれが分かるでしょう。現在のセルバンテス通りで1951年に偶然発見されたその洞窟からはセラミックの一部や洞窟壁画などの人間の形跡が発見されました。またその壁画はエストレマドゥーラ州で最も重要な洞窟壁画と考慮されています。その重要な発見を機会に洞窟のある場所に研究センターを設立しました。



❁ “また、前述のバロック様式のファースードと小尖塔があるカサ・デ・ラス・バレタスなどでみられます。”



❁ “また、エписコバル宮殿のファースードには浮き上げ装飾のアーチの土台があります。”

になりました。そして、この宮殿藩主は誇らしげにコウノリの細長い塔を抱えています。

大きな肩書きと監視塔が夜の静けさに反響します。そして、夜の照明にはそれをさらに強調する義務があるかのように思えてきます。正門には名前が付き、歓声がいつも響きわたり、頑丈な壁をもつ。しかし古いカセレスの集結した都市はアクセスし難い、友好的でないそして親密的でないという印象を受けるかもしれません。狭い道はその空気と移り変わりを守ります。宮殿のいくつもあるファースードは実際には一つの視線でそこを見渡しています。そして、花崗岩の石造にも最終的に親しみが湧いてきます。その親しみの理由は、窓や紋章の詳細や、宮殿をみることで、おそらくそれは簡単に理解のできることでしょう。同時



にそれは南部の土地柄の暖かさからくるものかもしれません。

サン・マテオ広場の周囲にある豪華な邸宅は一列に整列しているため圧倒を感じさせません。その調和の中の装飾はパレデス・サアベドラ宮殿、『エル・リコ』と呼ばれるロレンソ・デ・ウオジャ宮殿、また、前述のバロック様式のファースードと小尖塔があるカサ・デ・ラス・バレタスなどでみられます。そして再び、貴族の豪邸はその明確な方針をもって広場と同じ名前の教会と立ち向かいます。またその教会は古い最大のメスキータを占領し、そのゴシックの控えめなできばえから広場の中心に位置します。また、サン・フランシスコ教会の近くでは真の建築とその魅力に触れることができます。バロック様式のファースードは二つの白い塔に護衛されています。またその白い塔からは近隣のポルトガル寺院のいくつかの風 >



❁ “サン・フランシスコ教会の近くでは真の建築とその魅力に...”



貌が連想させます。また、1478年までユダヤ人地区であったサン・アントニオ地区の細道ではいろいろな話が語られます。また、市外にあるサンティアゴ教会が再現されました。これは12世紀にフラトラス・デ・カセレスにより設立されました。また、オルデン・デ・サンティアゴが先行だろうとされています。時代の反響も同様に城塞の外でこだましています。

16世紀、フランシスコ・ピサロを同行してアメリカで富を得たフランシスコ・ゴドイ・アルダナ氏のために城塞の外に塔と美しい窓を備えた宮殿を

建設しなければなりません。歴史の中での繊細な建築と、想像できる全ての場面をそこに収納します。城塞内がライトと薄暗さに眠気を誘っているあいだも、銃丸つき胸壁の囲いの外のマジョール広場では夕べの集いが続きます。また、フェスタ、催し物や聖体行列が行われるときには、その広場では古い過去の日々を目にすることができます。カセレスにはとても激しく避けられない歴史という、すばらしい天の恵みがあります。そして、過去の時代を散策することで、現在を一生懸命に生きてみるのはいかがえしょうか。



“また、フェスタ、催し物や聖体行列が行われるときには、その広場では古い過去の日々を目にすることができます。”



* アクセス:

カセレスはイベリア半島の三つの主要都市であるマドリッドーリスボアーセビリアを結んだ三角の中心に位置します。高速道路A-5(マドリッドーリスボア)から近代的に設計された二つの道路につながります。トルヒージョを抜け、そこから旧街道のピア・デ・ラ・プラタ(現在A-66)に乗り換えます。カセレスの北部はサラマンカへと、そして南部はセビリアへとつながります。

また、公共の電車やバスを使用することも可能です。

電車: www.renfe.es
バス: www.estacionautobuses.com

* インフォメーション:

www.caceres.es
観光オフィス:
オルモス, 11
Tel. +34 927 247 172



コルドバ 再発見

コルドバは建物や物質的なものだけでなく、精神、伝統、文化の町である。私たちの言葉、スペイン語では表現することのできない真髄である。

マリオ・ロペス

コルドバ

＊ 出会いの町



東と西の並外れた共存をみせるメスキータはこの町にとって不可欠な文化の痕跡を残した主人公といえます。その現在の都市の活力が受け入れられて、1984年にメスキータが世界遺産に登録されました。また、1994年には歴史的地区として旧市街全体が世界遺産に登録されました。

メスキータの馬蹄形のアーチのあいだを静かに歩いてみると、その時代の調和された反響と魔術的な東洋の雰囲気は驚きと疑いを感じると同時に、ここがどこかと思うことでしょう。そこはヨーロッパの西部、スペインのコルドバです。美しい夢物語の千一夜物語（アラビアン・ナイト）では楽しむことを止まず、アラブの遺産の再発見を止まないこの地域を満喫できます。しかし、この大聖堂に変えられたメスキータは制圧される視覚や感情を威風堂々と映し出しています。融合の世界では稀になく良くできた混合でカリスマ性を主張

しているこの町を穏やかに、ゆっくりと散策してみてください。現在とは複合と融合でなりたち、古めかしい考えと、常に『純粹』に対する疑いを後に進んでいきます。そのために、多くの町は見渡す限りの通りが変化に富む様子を表現するのに苦しんでいます。しかし、コルドバにはそれに対して努力する必要はありません。

詳細を逃さないように、感動を導くために、そして建物が構成する儀式を実際に体験



“...楽しむことを止まず、アラブの遺産の再発見を止まないこの地域を満喫できます。しかし、この大聖堂に変えられたメスキータは制圧される視覚や感情を威風堂々と...”



“アーチの幻想の間で時代の噂が流れる、そして、そこでは白いレンガと赤いレンガが識別ゲームをするかのように混ざり合います。多くの主都にみられる約850の柱はローマが発生の地です。”

するために、メスキータを初めてさまざまな人の感情に働きかける。アーチの幻想の間で時代の噂が流れる、そして、そこでは白いレンガと赤いレンガが識別ゲームをするかのように混ざり合います。多くの主都にみられる約850の柱はローマが発生の地です。珍しい話のひとつに、寺院が西ゴート族のサン・ビセンテ教

会を占領した時の話があります。それは初めてアラブ諸国の侵略を受けたとき、双方の信仰を分けあったということです。13世紀後半、世界で一番の大きさに変わるだろうメスキータの建設に取り掛かりました。そこは17000人が収容できる巨大な空間で、祈りを捧げたり、政治イベントや教育関係に関することを行う予定の場所でした。アブデラマン1世、2世そして3世、アルハケム2世、アルモンソール...全ての人とその偉大なメスキータに痕跡を残しました。ミフラブ、キブラ、ミンバル、オレンジの中庭...本物が生き残るこの舞台で豪華な一日やカリフ王国のすばらしい祝賀会の様子を想像するのはそう難しいことではありません。

16世紀、メスキータは壊され、ゴシック様式のライン、ファン・デ・エレーラ風そしてバロック様式をおびただしく織り込んだキリスト教のカテドラルに再び変わりました。カルロス1世皇帝はマンリケ大司教に再開発の許可を出したことを大変後悔したと>





“アルモドバルの門、 城壁の一部分と...”



今日の世界に反映されるべき内面が伝える歴史的和解の精神は、その建物の外面にも造り出されています。アラブ人は水平線にルネッサンスとバロック様式の鐘楼を建てました。そして、何世紀もの間イスラム教徒の正面玄関はキリスト教徒化の手直しと区別されています。現在、訪問者のざわめきの中、そしてお土産売り場や典型的なレストランのざわめきの中、路上を行く人の足取りは速く、人々は西洋にいながら東洋の魅力にならひ続けている。この道はどこに続くのだろうか？その問題で最も輝かしいもののひとつに町の郊外があげられます。例えば、アブデラマン3世の権力と偉大さを象徴している、すばらしい宮殿の町メディナ・アサーラの遺跡がそのひとつです。また市内には17世紀からその場所を占めているエписコラル宮殿に古い城が残ります。祈りの時刻を知らせるイスラム教寺院の高塔ミナレットはサン・ファン修道院そしてサ

いわれています。そして今、その後悔の重さを感じ、その視線を過去に戻し、再び未来に向かって前進します。ふたつの時間、ふたつの世界、ふたつの外見。その背景はそれを調和させ、正当化させます。そして、それは全ての国の中で本当にコルドバの歴史的転化の最高の象徴であるといっても過言ではありません。



“また市内には17世紀からその場所を占めているエписコラル宮殿に...”



*パティオと広場の穏やかさ

ローマ人が家の魂として中庭の大ファンだとすると、ファーサードに殆ど気を配らなかったアラブ人はそれ以上に中庭に没頭した人種といえるでしょう。コルドバの伝統的なパティオが由来のアンダルシアの独自の精神として、それは陽気な飾りと植物の色が特徴です。誰が通るのかを確認しているかのような、そしてそれを通りから表門越しに見る人々、そこには本当の穏やかさと平穏さが存在します。外面に開放されているが奥まった場所にあるサン・バシリオやサン・ロレンソのような地区はモニュメント的な建築物のほかに美しい親密な空間を際立てます。そして、もうひとつの魅力的な空間はスペイン語でブラサという広場です。キリスト教徒のために開かれた場所、アラブの町において外の世界の実用的な欠如として存在しました。ドローレス広場は間違えようのないクリスト・デ・ロス・フローレスの影の周りに象徴的な形を作っています。ポルト広場は15世紀の典型的な囲い住宅ポサダ・デル・ポルトに位置します。そこはドンキホーテに出てくる現在では新しくされ一般公開されています。アンダルシア地方ではここ以外には見られませんが、コレデラ広場はスペインのとても伝統的といえる囲まれた広場のひとつです。そこにはバルコニーと以前は闘牛場であった17世紀のレンガに囲まれた空間で、現在はマーケットや居酒屋が集まります。



ンタ・クララ修道院の塔でした。アルモドバルの門、城壁の一部分とカラオラの塔、グアダルキビルの反対側に建てられたローマ人の入り口となった要塞、アルモンソルの浴場とコメディアス通り...そして、そのおびただしさと綿密さはコルドバのカリフ王国の遺産に違いありません。また、その100万人の住民が住んでいたその都市は、ヨーロッパ最大だったといわれています。同様にその文化も大変栄えていました。アラブ人哲学者、医者、法学者でアリストテレスの注釈家のアベロエス、ユダヤ教進学者のマイモニデスそしてその他大勢がローマの哲学者セネカのインスピレーションを受けた進路を進みました。多くのすばらしさ、多くの知恵、そして多くの問題...

た町を創るために、その魂の全てが現代に蘇りました。コルドバはレコンキスタ後、14世紀以降、ローマとアラブの基盤によって造られたカトリック両王の城について定義が始まりました。その意味にも注意しながら、その混合の論証が続きます。その期間は捕虜にされたボアブディル・デ・グラナダ王の悲嘆の証人となりました。同様にコロ、イサベル、フェルナンドの会見でもまた証言されています。未来の発見者の先見の言葉が美しい庭園に拡散したに違いない、現在その名前をつけられた広場は熱狂にあふれていて、それは未だに健在のキリスト教徒の城塞の芸術作品であるマルムエルタの塔の前にあります。おそらく『フェルナンディナス』と呼ばれる14の教会のいくつか>

侵略の繰り返しで何世紀もの間に多くが崩壊されました。しかし、このことが衰退の時代を超えても、ローマ人、西ゴート族そしてアラブ人と共に主役を演じた時代の思い出に没頭しているというこの町の特徴になっていることもまた事実です。唯一の共同の世界遺産として登録され、アンダルシアで最も重要な活力に満ち





に最良の未来をもたらす計画のために神に祈りを捧げたことでしょう。そしてフェルナンド3世の命令によって13世紀から14世紀にかけて『キリスト教化』の町を建設しました。それらの教会にはサン・パブロ、サンタ・マリナ、サン・ニコラス・デ・ビジャ、ラ・マダレナ、サン・ペドロ、サン・ロレンソなどがあげられます。

現在はキリスト教化に手直しされたものが目立ちますが、諸説混合主義の美しさの詳細をひと時も見逃すことはないでしょう。家の正門に

“再びユダヤ人街の
通りに隠れたシナゴ
ーグとのその多様の...”



描かれた絵、その白さ、窓の手すり
とたくさんの鉢植え。それはまるで狭
いねじり曲がった路地のあいだを小
人が追いかけてつをねだっているよう
です。そしてその変化はキリスト教の
ほかの作品にも溝を刻みました。例
えば、大天使が献身しているトリウ
ンフォ・デ・サン・ラファエルのモリス、
現在は音楽学校のマルケス・デ・フ
エンサルダニャ・デル・バジェ宮殿、
国家議事堂として使われている旧マ
ジョール・デ・サン・セバスティアン病
院、ピアノ宮殿美術館、ビジャロネ
スの家などがあります。そして、再びユ
ダヤ人街の通りに隠れたシナゴ
ーグとのその多様の共存についての話に
戻ります。シナゴ
ーグとは1492年に
民族が追放されるまで住んでいた地
域の名前です。そして、それは歴史
からの教訓であり、また町に反映した
変化でもあります。

考古学博物館や美術館のホールそ
して教区の芸術を見て回ることによ
って多くのことを考えさせられます。
また、コルドバ出身の画家フリオ・ロメ
ロ・デ・トレスへ捧げた博物館は芸術
的センスとその人気の両方を持ち合
わせています。タウリノ(闘牛)博物館
も見物する価値のある博物館のひと
つです。コルドバ出身の熟練した闘
牛士にはマルレテ、エル・コルドバス、
ラガルティホまたはゲリタなどがいま
す。そしてその芸術は生死のぎりぎり
のところのみられます。そして、その
感動は訪問者の予想を超越すること
でしょう。そして、コルドバの思い出は
唯一の記憶として心に残ります。

*** アクセス:**

マドリッド、マラガ、セビリアまたはグラナダより車またはバスでの移動が可能です。

また、マドリッドかAVEで2時間、マラガとセビリアから40分の距離です。また、その他のタイプの電車(www.renfe.es)でも移動可能です。

セビリアの空港から1時間、マラガ、グラナダの空港からは2時間弱です。

*** インフォメーション:**

www.turismodecordoba.org

観光オフィス:

カジェ・レイ・エレディア, 22

Tel. +34 902 201 774



クエンカ 再発見

クエンカ、そこは抽象的、純粹、銀色、上品な石、そして現在と過去でできてる町。同様に、中世の立体派、エレガント、痛々しい、忠実な、子供を産んだ狼のようにやわらかく、宙に浮いた、開放的な町。

クエンカ、そこは光輝、軽快、孤立、冷静と興奮、無限、平等、妄想、郷土のすべてを表現している町。古い町クエンカ。

カミロ・ホセ・セラ

カセレス

※ 不朽の町



高い岩地に囲まれて、そこに座り込んでいる『宙吊りの家の町』はさらに純粋で衝動的な自然を取り入れた人間の都市です。独自の価値の他に多くのメリットを認められ、1996年に世界遺産に登録されました。

高さともまの感情にかきたられ、そこは訪問者の感情を高揚させます。古いクエンカの高いところにある岩のイメージそして、フカル川とウエカル川の岸から空に映る純粋な地学的想像だけが心に残る。そして全ての感性の手段を奪います。他の美しい町が少しずつまっすぐに引いた水平線上に現れてくる。最後に本当の魅力だけを心に残すために、ひとつひとつの感動を発見していかなければならない。しかしクエンカに限っては、それは逆になります。その標高の高さ、

大自然そして内容の濃い風景からいきなり心を一撃を与えてきます。サン・ファン門からの景色は正しくその一撃です。フカル川までの木々の間を通る長い散歩道とぎっしりと詰まったごつごつした岩の壮大な景色は古い建物ととても良いバランスを取っています。入り口にあるその感動は、一瞬にして広がり、はやく進んで、もっと発見したい気持ちにかられます。そして、素晴らしい外観を心にしまい込み、次から次へ感動をと連発します。

フカルの渓谷の長さに沿って順番に歩いてみてはどうでしょうか。時間はきっと余るでしょうし、急いで生き

“...フカル川とウエカル川の岸から空に映る純粋な地学的想像だけが心に残る”



※ 博物館と風景

2016年文化都市の候補都市になるために、クエンカは幅広い博物館、美術館の催しを提供しています。宙吊りの家のスペイン抽象美術館はアントニオ・ペレスにより設立され、古典から現代までの幅広い作品を取り扱います。アントニオ・サウラ財団ではテンポラリーな展示会が開かれ、サン・パブロ教会でグスタボ・トルネルの作品を展示しているトルネルの空間や、では美術と最新技術に専念しているMIDE(国際電信博物館)があります。他の文化関係にはクエンカ博物館、ディオセサノ博物館、セマナ・サンタ(聖週間)博物館また、カスティージャ・ラ・マンチャ科学博物館などがあります。都市の環境自体が自然博物館のようで、シウダ・エンカンターダとしてよく知られています。水と風の気まぐれな行動で刻まれた岩でできたすばらしい迷路。それぞれに名前がついています。エル・プエンテ、ラ・フォカ、エル・トボガン、ロス・オンゴズ...そして、その中に緑に松ノ木、柳、しなの木、薄茶色や、白ポプラの木があります。また植物もクエルボ川が生まれたときにそこに生息していました。また、その河川の流れの起源となったその周囲の滝の水のカーテン。明示的なこの風土のお陰で沢山の様々なスポーツがここでは満喫できます。またその殆どが市内でも体験できます。カヌー、サイクリング、ロッククライミング、ハイキング、パラグライダー、バンジージャンプ...



るせいで多くの詳細を見逃すのはもったいないことです。スピードを上げずに歩いてみて下さい。足を止める場所とのんびりと中身の濃い時間をおくることで、沢山の川や岩や優雅な建築物などの詳細を心の中に宙吊りにすることでしょう。古い城塞に隣接するサン・ミゲル教会、連続したスタイルの仕上りの世紀の暦とコンサートホールに再建されること

で、都市は岩が生き続けていることを確信します。そして発見が続きます。さらに上へと向かい歩いていきます。15世紀のバロック様式の寺院のビルヘン・デ・ラス・アングスティアス礼拝堂からみる、フカル渓谷のパノラマは圧倒的です。ここは本当に訪問者を驚かせ続けます。岩壁と植物の型にはまって調和しているさまは川の緑の水によってさらに強調



“標高1001メートルの町で一番高いカステージョ地区へと歩くととき...”

塔から見渡すことで確認できます。人間の暗さは異端審査の影からきています。異端審議は隣接する控えめな建物で行われていました。そして、現在そこは地方歴史公文書館として使われています。サン・ペドロ教会で期待に一度祈りを捧げ、そして15世紀からの生命のために祈りを千回祈りを捧げます。そして遙か昔、メスキータがこの場所を占めていたころから、それは行われていました。時間の流れと、それぞれの場所で生きてきた全てにめまいを感じる。そして、ウエカル渓谷を訪れて、ベストのアーチを渡り、標高1001メートルの町で一番高いカステージョ地区へと歩くととき、再び高さにめまいを感じるでしょう。そして散策は続きます。フリアン・ロメロ通りに沿って壮大な景色が続きます。シンプルなデザインと人気のある建築物を通してサン・パブロの橋まで続きます。16世紀から崩壊されるまで崖に守られてきた石でできた橋は、1902年に金属の歩道橋に変えられました。それを渡るときにするめまいは本物で物理的

され、神または人間の仕業、それとも魔法または驚異の賜物といわずにはいられません。

人間的センスと美的センス、そしてそれ以上に必要性を簡素にした、この都市構造は完璧なものといえるでしょう。そして、それは城外に残った

“16世紀から崩壊されるまでがけに守られてきた石でできた橋は、1902年に金属の歩道橋...”



“...ウエカル渓谷を訪れて、ベストのアーチを渡り(...)再び高さにめまいを感じるでしょう”

であることを実感します。しかし、実際には見渡される景色の視覚症状だけです。そこはクエンカの高さとも象徴的な場面だといえるでしょう。

市内のすばらしい山々を振り返りながら感動的な歩道を通るとサン・パブロ修道院に辿り着きます。そこは16世紀に他の岩との自然な継続のようにして建てられました。そして今日では国営パレードの本部があります。宙吊りの家のイメージは橋を渡ることよりもすでによく知られています。そして、とても満足のいくものとして注目を集め続けています。繰り返されるシンボルを認識し、その外観の大きさを確認します。そして待ちに待ったものはすばらしい代償に相当するでしょう。その舞台装置の全てについて考えてみると、17世紀の断崖の上の出っ張りに作られた、家全体がひとつのブロックであることに気づくでしょう。3つが崩壊から守られ、その独自のバルコニーは最高の再生させるために運ばれました。そのうち2つは再利用されています。ひとつはスペイン抽象美術館として有名な芸術家で動かされていて、町で評判的な画期的な事の一つです。なぜなら、芸術とは常に高いところを目指すものだから...

ウエカル渓谷の上の方、有名なサン・マルティン地区の前、はっきりと区別のできるイメージが現れます。それは『摩天楼』と呼ばれ、控えめな家々が連なり、また、それは崖にも連なります。その住宅街には、高さが12階立てのアパートに及ぶことがあります。しかし、主要玄関のある反対側は4階か5階くらいになります。側にあるほっそりとした脇道、ア

ルフオンソ8世通り、簡素な建物が並ぶこの場所はクエンカの高さと古さの中心地です。その家々は最近数十年の間にきれいに着色され、楽しそうに生き生きとして見えます。このようにきれいにデコレーションされ、混雑する毎日は並外れた空気を帯びたようです。特に、同じ通りにはサン・フェリペ・ネリ教会があり、そこは豪華なロココ様式のインテリアが施されています。またこの教会では、聖週間の祭典中に、その石段でミゼレーレの歌が歌われます。これは町でよく知られている行事のひとつです。他のことを感じるのと同様に、高さに危険を感じることは空、天空、そしてさらに精神的何かを感じることに似ています。

“...アルフォンソ8世通り、簡素な建物が並ぶこの場所はクエンカの...”





その権力がこの土地に及ぶまで、貴族たちはより真直ぐに計画を考え出さなくてはなりません。そして、サン・ペドロ地区に住宅を建てました。時間の経過の強さは今も変わらず、同じリズムで、そして誰もが知っているように、それを許される人も、ものもありません。しかし、そんな時の流れの中、執拗に心地よい音を奏でるマンガナ時計塔を連想します。その時計塔は16世紀の作品で、20世紀には同じ名前を持つ広場と共に改造されました。メルセデ広場のバロック様式のファサードの凹型の装飾が鐘の音ごとに変わるとは思えません。そうならば、市庁舎の官僚的な反復音が共鳴することでしょう。市庁舎は三角形のマジョール広場にある3つのアーチからアクセスのできる18世紀の建築物です。三角形のもうひとつの角にはペトラ

ス修道院があります。そして最も突き出た点にはカテドラルがあります。定型化された、そのファサードはネオゴシック様式です。最も高いところにある神秘的な空気は無駄なアーチから逃げて、12世紀に建てられた建物の本来の場所に戻ります。ベントウーラ・ロドリゲスによって設計されたバロック様式の透明な祭壇のように豪華な内部になっています。信仰の半透明なかたちがそこに見えます。

上流には古いクエンカとその感情のすべてが、下流には新しい都市の確実性と毎日の問題があります。常に、ひと休みして、時々フェスタがあり、苦悩を避け、サン・フランシスコ通りへとタバスに繰り出します。モルテルエロトラ・マンチャ州(マンチェゴ)のワインを満喫する。そうすることで、上から下まで全てが上手くいくでしょう。

“メルセデ広場のバロック様式のファサードの凹型の装飾が鐘の音ごとに変わるとは思えません”

“そして最も突き出た点にはカテドラルがあります。定型化された、そのファサードはネオゴシック様式です”



*** アクセス:**

クエンカはマドリッドから167キロのところにあります。車での移動はA-3からA-40に乗り換えます。またバスでの移動も可能です。(www.avanzabus.com) また電車での移動の場合は、マドリッドとバレンシアを結ぶ線をご利用ください。(www.renfe.es).

*** インフォメーション:**

www.cuenca.es
観光オフィス:
ブラサ・マジョール, 1
Tel. +34 969 241 051
www.turismocuenca.com
クエンカ観光財団:
アベニダ・クルス・ロハ, 1
Tel. +34 969 241 050



イビサ 再発見

何か知らせは？船がイビサに流されました。船で何でも知ることができた。また、同時に船なしで外の世界を知ることは不可能だった。遠くで起きたハリケーンが原因で起こる大波もその知らせのひとつだった。広範な可動性を持つ海では地平線の向こうの出来事を推測することが可能である。

エンリケ・ファハルネス・カルドナ

イビサ

＊宝島



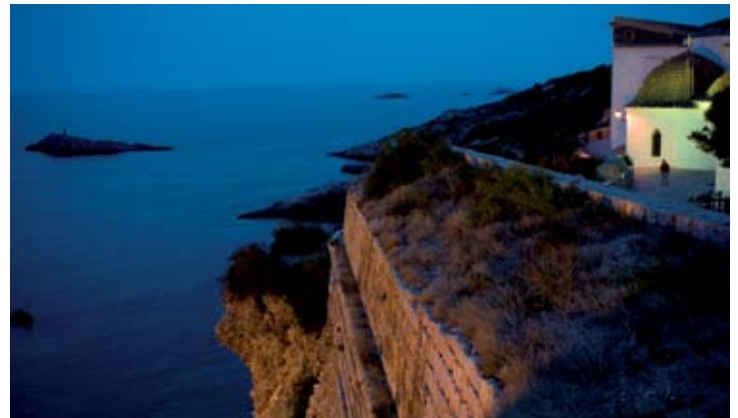
1999年、ダルト・ビラの城塞、プッチ・デス・モリンス遺跡、フェニキア人の住んでいたサ・カレタそして、セス・サリネス自然公園の海洋植物ポシドニア海草原が世界遺産に登録されました。観光客を驚かせるエイビッサの沢山の宝の中でも、特にこの4つの話題であふれています。

サ・カレタビーチを囲むの赤茶色の斜めになった崖に太陽の日が差します。穏やかなターコイズブルーの海は、最後まで残った海水浴を楽しむ人々の帰りを遅らせます。なぜなら、そこはとても素晴らしい、パラダイスだからです。フェニキア人にとってもそこは楽園に見えたに違いありません。地中海東部の国境からの航海の後の8世紀、彼らはそこに定住することを決めました。その多くの美しい場所は航海中に発見されました。この島は光の中でなだらかな山と密度の高い森林が身を縮めているような様子をしていました。そして、その姿はまるで女神ビーナスから祝福を受けているようにもみえました。そして、その日、最後の太陽は町の迷路のような遺跡か

ら影を消します。その様子は一瞬、過去の命が蘇ったようにも見えました。28世紀前にも全く同じ夕日が、日常生活、全ての問題や不安を照らしていました。

海水浴を楽しむ人々のように多くの住民がここを離れたがりませんでした。数キロメートル北へ進んだ新しい定住地に移ることがすでに決められていました。そこはよりよい条件で湾が接続され、島の可

“ビーチやパーティーだけを目的に来た観光客は防衛のために垂直方向につくられた迷路の風景、城塞、塔、そして...”



“地中海特有の風景の調和とカリスマ性や伝統的な白い建物など...”

能性を永遠に継続できる場所でした。その道は現在、車道となり、市と島の南部の間は7世紀の始めにフェニキア人が重い荷物や不安を背負って歩いた同じ道となりました。神々によってイルミネーションされたその湾を見つめると、とても和らぎます。その発信の岬、肥沃で平坦な土地のもと、イボシムと呼ばれる永遠の生命を持つ都市という新しい世界をつくります。

古いフェニキアとの承諾の中で歴史が描いたすばらしいプロフィールの前に、現在の観光客の空気が広が



ります。その後カルタゴ人、ローマのエブスス、アラブのジャビサ、そして最終的にエイビッサがアラゴン王国によって侵略され、再植民地化されました。そして、ビーチやパーティーだけを目的に来た観光客は防衛のために垂直方向につくられた迷路の風景、要塞、塔、そして屋根に驚き、魅了されます。それらはまるで、港の海に反映した巨大な船のように見えるでしょう。そしてその次の日は、地中海特有の風景の調和とカリスマ性や伝統的な白い建物などを発見するでしょう。そして、全ての人がこの島は全てを持っている、その名声はそれ以上に価値のあるものだと言えよう。

国際的な港と、人が往来する大都市の前にあるマリナのテラスで一休みし、色とりどりの店のある古い建物の通りを切って進みます。きつと前の晩に夕食をしたらろうレストランのあるビルヘン通りの伝統に目を大きく見開き観察をする。そして、メル>

“色とりどりの店の
ある古い建物の通り
を切って進む...”



* 海底の庭



セス・サリネス自然公園の海洋植物ポシドニア海草原。それは地中海固有の生態系に不可欠な植物です。そして、この植物はピティウス諸島のメインであるイビサとフォルメンテラの間に広がる海底に草原をつくっています。海に隠れているものを知る、それは驚くほど青い。セス・サリネスまたはエス・カジャレットのイビサ南部、イレテスまたはレバンテのようなフォルメンテラ北部の海水浴場はもうひとつの楽しみです。両方の島の多く（その他のスペインの地中海沿岸地方では少ない）は実質的に手のつけられていないままの状態です。セス・サリネス自然公園はまた、サリナス地域においての、その両方の島の領域についても理解をしています。広範囲のイビサはカルタゴとローマ人によって開拓されました。そして、当時の面影を残すかのように未だに製塩事業が営まれています。サギやフラメンコが飛んでくる様子とはとてもすばらしい眺めです。



カット・ベル(古市場)と呼ばれるローマ寺院に着きます。そこからは『垂直の迷宮』へアクセスができます。ランプの光は16世紀にフェリペ2世の命令によって建設が進められた防衛のための圧倒的な城塞の主要門であるタウレスの門まで伸びます。そこでは、トルコによる頻繁な攻撃に、銃器が登場しました。そして中へ入ると、アルマスの中庭にあるロマネスク様式のアーチをくぐります。そこでは伝説上ヒッピーが市場を開いていたといわれています。彼らもまた古代フェニキア人のようにこの島の美しいハーモニーに魅了されたに違いありません。城塞とイビサの典型的なファサード間のを抜け、

“...防衛のための圧倒的な城塞の主要門であるタウレスの門...”

レストランのテラスと落ち着くの甘い音を奏でるピラ広場を歩きます。

城壁内はすでに何世紀にもわたる時間によって侵略された静けさが広まります。つまらない先入観はきっぱりと消してください。そして今、サ・カロサ広場のブーゲンビリアやヤンの木々の間に静かに現れる、異なった時間と文化によって造られた石とファサードの深さに感動してください。そして次は、サンタ・ルシ



“そして次は、サンタ・ルシアの砦から見える絶景の地平線”

アの砦から見える絶景の地平線。空に溶ける胸壁の青い海の線。バラ・デ・レイ通りから始まる湾や港の配置、町の市松模様を見つめる。そして感情を高めるために、さらに上へと歩いて行きます。現在は市庁舎のドミニコ会の旧修道院の穏やかな南の白さ、歴史を呼び覚ます小さなサント・クリアック礼拝堂。また、この礼拝堂の門は、1235年8月8日にフアメ1世が町と島を侵略するために送った戦士が進入した門だという伝説を持ちます。中世の貴族が広い家を作るのに選んだマジョール通りの説得力のあるゲートと念入りな切り石造の建物。その中のひとつは現在、プロジェクト博物館としてプロジェクト・ビニャスとプロジェクト・リゲルの作品を展示しています。またそこは20世紀半ばの本物のイビサと触れる感情的なアプローチの場所といえるでしょう。



“バラ・デ・レイ通りから始まる湾や港の配置、町の市松模様を見つめる”

“そしてカテドラル広場へと着きます。そこは14世紀以降に建設された”

狭い通りの穏やかな影を渡り上昇は止まりません。そしてカテドラル広場へと着きます。そこは14世紀以降に建設された。また当時、教皇庁の建物の建設も進められていました。そして現在ではマディナ・ジャビサ文化芸術センターとして町の歴史に現代的にアプローチしたり、イスラム教徒の時代に焦点を当てています。全ては『垂直の迷宮』のように目だって君臨するそのカテドラルのようなゴシック様式のカタルーニャの建物と比べることで楽しめます。その広場からはまるで空から眺めているかのように湾と町のパノラマを眺めることができます。そして、次に旧大学であった建物のエイビッサ・フロンテラ考古学博物館の最奥の起源の見学へと向かいます。サン・ジョアン要塞にある現代美術館、最も古い場所で最も新しい作品を>





“もう一度海に視線を戻して南部の胸壁とビーチの巨大さ、そしてフォルメンテラの心地の良い影をみてください”

展示する場所です。歴史を旅する新技術としてサン・ペレ要塞では城壁の建設の境界石を展示しています。また、サン・ジャウメ要塞では現在、軍事世界での技術の発展についての展示を行っています。

前述で丁寧に説明したように順番に沿って街を散策してみてください。しかし、まだカテドラルの裏には道が続きます。もっと上まで歩かないといけないのでしょうか？いいえ、あと少しです。アルムダイナの建てた城塞の斜堤と2010年にバレアレス諸島で初の国立パドールとなった城塞までです。もう一度海に視線を戻して南部の胸壁とビーチの巨大さ、そしてフォルメンテラの心地の良い影をみてください。また、隣接する山と風通しのいい屋根の水車小屋。プッチ・デス・モリス(水車小屋の丘)その動作で水が町の高いところまで

届くために建設され、今でも保管されています。生きているものへ命をそして、過ぎ去ったものには噂を、こうして何世紀も過ぎていきます。山をくりぬいたフェニキア・カルタゴのネクロポリスは地中海地方でも最も良い状態で保存されています。町の創設以来7世紀までの間に、3000以上の地下埋葬品が発掘されました。その証拠品はひとつずつプッチ・デス・モリス考古学博物館に展示されています。訪問者はこれらの沢山の魅力を持つ町を知り、その表面積を覗いたたったこれだけの大きさなのかと驚愕することでしょう。そして彼らはタニットを知ることにより幸せを感じることでしょ。タニットとはこの島の象徴でカルタゴを代表するアスタルテという女神のことで。またその女神は初期のフェニキア人に同行したといわれています。そして魔法は今も続きます。

* アクセス:

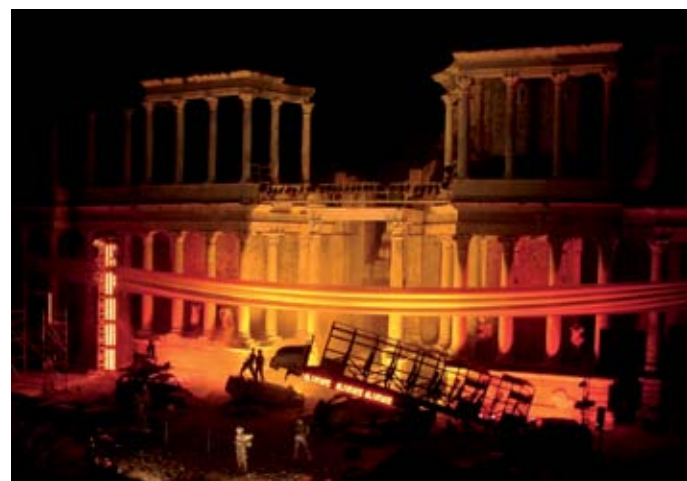
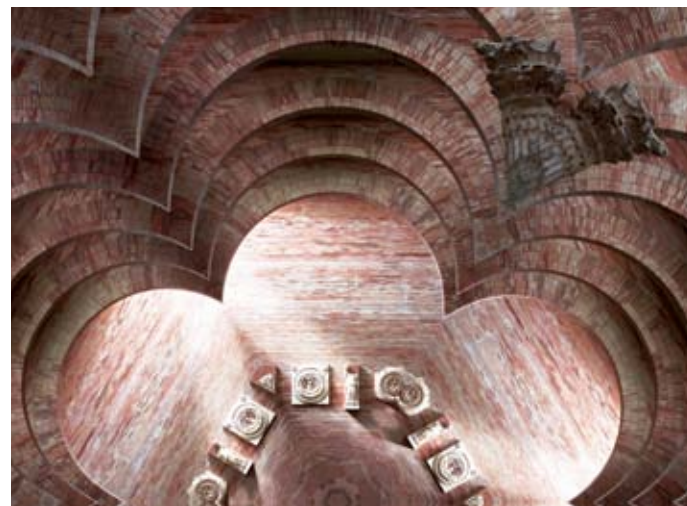
飛行機での移動では、スペイン国内またはヨーロッパの様々な場所からの沢山の便が出ています。一般情報は www.aena.es でご覧下さい。またマジョルカ、デニア、バレンシア、バルセロナそして様々な地中海大陸の港からは船が出航しています。トランスメディテラネア社(www.transmediterranea.es) また

はバレアリア社(www.balearia.com) で取り扱っています。

* インフォメーション:

www.ibiza.es

カテドラル広場、クリアビル内
観光オフィス
Tel. +34 971 399 232



メリダ 再発見

全ては時間と共に移り、そして消滅する。
人事にはどんな安定性があるのだろうか。
ここ、メリダにはアウグストが町を造るために軍人を送ったという、有名なエメリタがいました。

エリオ・アントニオ・レブリハ

メリダ

※ ローマの魂と永遠



音楽と華やかさの中、たくさんの松明の光が溢れんばかりに散らばって、まるで舞台を歩き回っているかのようだ。新しい演劇、新しい町。ローマ、君はなんて偉大なんだ！15世紀のある夜、マルクス・ウィプサニウス・アグリッパ主催の大規模な舞台空間の開設のための祝賀会が開かれていました。

アウグスト皇帝はカンタブリア戦争で戦った兵士たちを定着させるために町を建設しました。そして、アウグス



タ・エメリタはその10年ほど前に生誕しています。グアディアナ溪谷の肥沃な平原はベテラン兵士たちには褒美でした。ちなみに、その当時のポルトガルの領土のローマ化を確立しました。その新都市に、偉大であれ、そしてローマの繁栄を確立せよといった願いが込められました。その土台は祈願の言葉そのものでもありました。そしてメリダは大きな門から歴史に一步を踏み入れ、数年後にはその大きなローマの町には全ての要素が揃い、スペインの最も重要な町になるのは時間の問題でした。アウソニオによると、帝国の全ての都市で9番目の大きさになるだろうとのことでした。そうして、舞台の上の石柱や石像の間を踊り続け、役者たちをあおり続けたのでしょう。

あの初めての夜の響かないこだまは、まるで静止画面のようでした。そして2000年以上も後に誇張したメリダの大劇場の残部は町のシンボル、そして町の不可欠なイメージとなりました。訪問者は大劇場の階段をさまよい、厳粛に保存されている舞台の前の石像や石柱を賞賛します。夜の舞台の仕掛け、5500人の観客が上から下まで階層別に決められた石の座席につくざわめきなど、とめどなく想像がわいてきます。そしてすぐ横には円形競技場が開設され、剣闘士とエキゾチックな獣が生死をかけた生き残

“...メリダの大劇場の残部は町のシンボル、そして町の不可欠なイメージとなりました”



“正確な楕円形でできた円形競技場の残部として残る砂場、観覧席、熱気に満ちた観客の前に出る前に剣闘士が祈りを捧げたホール。ここには歓喜だけが飛んでいます”

りの戦いを繰り返しました。そして、ここでは入場料を払って見物にきた14000人の観客の歓呼が響き渡りました。このようにして、一週間また一週間、一年また一年と時は経ち、衰退する帝国の空のゆっくりと無情に浮かぶ雲までもを消散していきました。そして5世紀以降、全てが見捨てられました。西ゴート族やアラブ人が通過し、そしてレコンキスタの道程

を経て、長い時間の先の未来が通っただろう、このすばらしい石までもが見捨てられました。

それにもかかわらず、偉大さをみせつけているこの建物はなんて執拗なのだろう。正確な楕円形でできた円形競技場の残部として残る砂場、観覧席、熱気に満ちた観客の前に出る前に剣闘士が祈りを捧げたホ



※ 古典演劇

ローマ劇場と円形劇場では毎年、メリダ古典演劇フェスティバルが開催されています。スペイン国内で最も意味のある文化行事の一つです。それは夏の間中、ギリシャとローマ時代の作家の作品が本物の舞台上で表現される素晴らしい現実です。この劇場の舞台の偉大さに目を見張った、歴史に残る女優のマルガリータ・シルグがそこでメデアの表現を望んだことが始まりです。ミゲル・デ・ウナムノによると、1933年6月18日に熱狂的な観客そして共和国大統領のマヌエル・アサニャやグレゴリオ・マラニョンといった著名人の前で初公演されました。そして翌年、セマナ・ロマナ（ローマ週間）と称して、再びマリガリータ・シルグがエレクトラと共に公演しました。市民戦争と独裁者によりその活動は1953年まで中止されていました。そして、その年、フェドラの公演でフェスティバルは再開され、今日に至ります。1959年のヌリア・エスペルトのメデアの公演はそのプロ意識と品質の高さにおいて決定的な弾みをつけ、それ以来、プロ意識と品質の高さがこのフェスティバルの特徴となっています。



ール。ここには歓喜だけが飛んでいます。そして、町の北部では一目で誰だか分かるシルエットのベン・ハーのワンシーンを歌う姿も急増しています。

5世紀にもわたったローマ帝国にも仕事やフェスタ、恋愛や和解、通り

や家族といった日常生活がありました。そしてその日常生活は一日にして他の文化の建築物の下に葬り去られました。何人の証言者やいくつかの感情が現在のメリダの建築物の下にあるでしょうか。考古学的または習慣的になった発掘がその歴史を語ります。

“国立ローマ博物館では公開されていません”



カサ・デ・アンフィテアトロ（円形劇場の家）と呼ばれるモザイクがブドウの収穫期の様子を物語っています。国立ローマ博物館では公開されていません。ラファエル・モネオによるデザインで劇場や円形競技場に隣接し、1989年に開設した有名な建物はメリダのローマ時代の歴史の衰退の素晴らしい終結といえます。当時の強靱な生存者のようです。また、そのレンガ造りの壁はオリジナルな建築で石柱や石像を美しくさせています。大きなアーチに木漏れ日が差し、昔の生活とその理由について説明をしているかのように、沢山の整った芸術作品を光が照らしています。博物館は考古学的遺産を誠実な方法で保管しています。墓、壁、石畳でできた道の一部...感動的な旅は補償されています。そして止まることなく、町の隅々を歩き回ってください。アウグスタ・エメリタはメリダの近代的な顔を持つ場所を眺めています。

信条に従うように、石を寺院の前に置きます。町の殉教者のサンタ・エウラリアは火星に捧げられた神社の遺跡をつかい建設された礼拝堂で敬愛されています。その石も同様に隣接する教会の一部として使われ、その名前がつけられています。今日の訪問者はローマの構想の舞台をアビエルト・デ・メリダ博物館の受付で受け取ったインフォメーションに沿って見学することができます。ラ・カサ・デ・ミスレオのモザイク、フォーラム残部と広く散らばったもの、そしてグアディナの川岸に沿ったモレイラスで明らかになった町の跡を追求しなくてはなりません。賞賛は常にローマの基本構造の原因となっていました。3つの柱をもとにアルバレガス川の浅瀬を救ったサン・ラサロの水道橋ができました。そこはグアディアナの支流でロス・ミラグロスの水道橋でもあります。またそこ

には美しい仕上がりの3重のアーチが当時のアイデアを伝えるのに十分に保存されています。その高い基部を通じプロセルピナのダムの水が町に届きます。また、そのダムは水道橋から5キロの離れたところに位置し、ローマダム全体といくつかの本来の運河を未だに残しています。流動的な要素はトラハノのアーチのある偉大な寺院とディアナ寺院で行われた儀式を潤しました。ディアナ寺院のほっそりとした柱はコルボス伯爵宮殿で16世紀から使用されていたものです。アウグスタ・エメリタはみられることを望んでいるかのように。>



“ロス・ミラグロスの水道橋でもあります。またそこには美しい仕上がりの3重の...”





❁ “ディアナ寺院のほっそりとした柱はコルボス伯爵
宮殿で16世紀から使用されていたものです”

グアディアナを交差するローマ橋の姿は永遠ではっきりとしています。その橋は当時最も長いもので、今日ではサンティアゴ・カトラバの考案で建設された空と対照に白い調和のルシタニアの橋が目立ちます。砦の壁で雄弁を振るったアラブの時代、サンタ・マリア教会やサント・ドミンゴ修道院のキリスト教の時代など、現在のメリダは独自のメリットを主張すると共に他の時代についても主張し

“グアディアナを
交差するローマ橋
の姿は永遠では
っきりとしています”



ています。スペイン広場のいくつかの旧家はルネッサンス様式を連想させます。そこはオレンジの木に囲まれ、今日では日常の生活が営まれている場所で、サンタ・エウラリア通りにある店を見て回ったり、その付近のレストランやバーに入ったりと、多くの人で賑わいます。また新メリダは未来へも目を向けています。地方都市そして、コミュニケーションの不可欠などの特徴から国会議事堂やヘスス・デルガド・バルオンダ図書館のような近代的な建物が建設されました。それはまるでアウグスタ・エルミタのようです。そして、かつての石のようにローマ市内の重要性についてもまた再現したいと望んでいます。



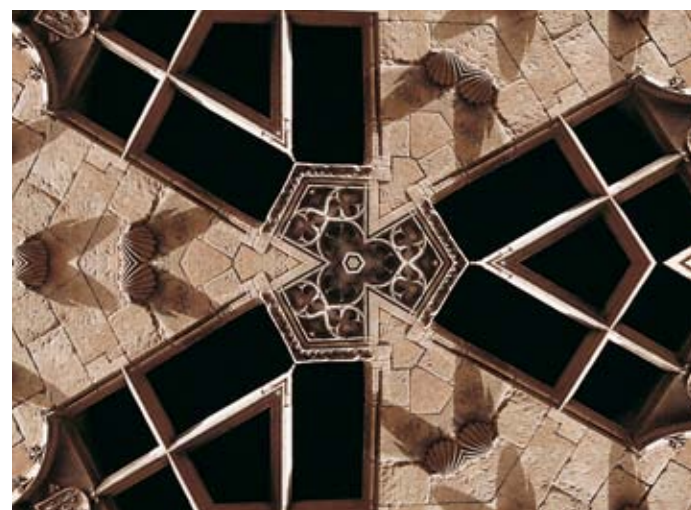
*** アクセス:**

メリダへのスペイン国内のどの地方からでも非常に簡単にアクセスができます。車での移動はA-5(マドリードーリスボン)、A-43(リスボンーバレンシア)そしてヒボンからセビリアのルートA-66(ビア・デ・

ラ・プラタ)があります。またマドリード、リスボン、セビリア、ボダホス、カセレス、そしてシウダ・レアルからは電車での移動も可能です。

*** インフォメーション:**

www.merida.es



サラマンカ 再発見

サラマンカにいる娘よ、楽しみなさい。
すべての人が科学の母だと呼ぶその大学で。
10万から12万人の学生が学ぶ大学、
若い人、わがままな人、勇気のある人、自由を求める人、
浪費家、控えめな人そして機嫌の良い人。

ミゲル・デ・セルバンテス

サラマンカ

* モニュメントと密接



ヨーロッパで最も古い大学の周りで育った歴史的そして記念碑的な都市の中心地は1988年に登録され、昨年で世界遺産登録20周年記念を迎えました。

マジョール広場に夜明けの太陽が射し、最初のぬくもりを感じる。石を金色に変える黄色がかった太陽の光。この時間の純粋な金の輝き、不規則で居心地よく閉鎖されていて、守られている四角形の88のアーチやリリーフや肖像のできる影遊びをする。このパティオをもつ大きな家は、この町です。その偉大なリビング。私たちはそこで、待ち合わせをしたり、お茶をしたり、おしゃべりをしたり、散歩をしたりします。住民や訪問者の生活はすべてそこを通ります。そして常に私たちの心がそこに



あることを意識させます。潜在的で開放的な場所。ウェイトレスも太陽の光が市庁舎のファサードを射す時にはバーのテラスを開放します。そしてあちらこちらでカメラのシャッターを押す早起きの観光客を魅了します。この偉大でありながらも、親しみの沸く広場の写真について、旅行者はいったいどんな風にかき綴るのでしょう。

文句なしのスペインの広場の女王そして、モニュメントのシンボルである広場の歴史のなぞを解明します。大きな空間の一部は1724年に建設が始められたアルベルト・デ・チュリゲラの設計した四角い建物がある旧サン・マルティン広場を占めます。そしてアルベルトの死後、アンドレス・ガルシア・デ・キョネスにより指揮が取られました。その賞賛は1755年の開設以来続いています。そして、そのハーモニーと絶妙な装飾は絶賛せずにはいられません。そのスタイルはただ単にバロック様式でもなければ、ただ単にチュリゲラ様式でもありません。外側を見せる代わりに、内側を見せる宮殿は多くの人で埋まります。それはまるで奇跡のようです。

太陽の位置によって、その魔法の力も変わってきます。太陽の光を受けることにより石が独特な色に変化します。近くのビジャマ

“私たちはそこで、待ち合わせをしたり、お茶をしたり、おしゃべりをしたり、散歩をしたり...”

* イエロニムス、空への道

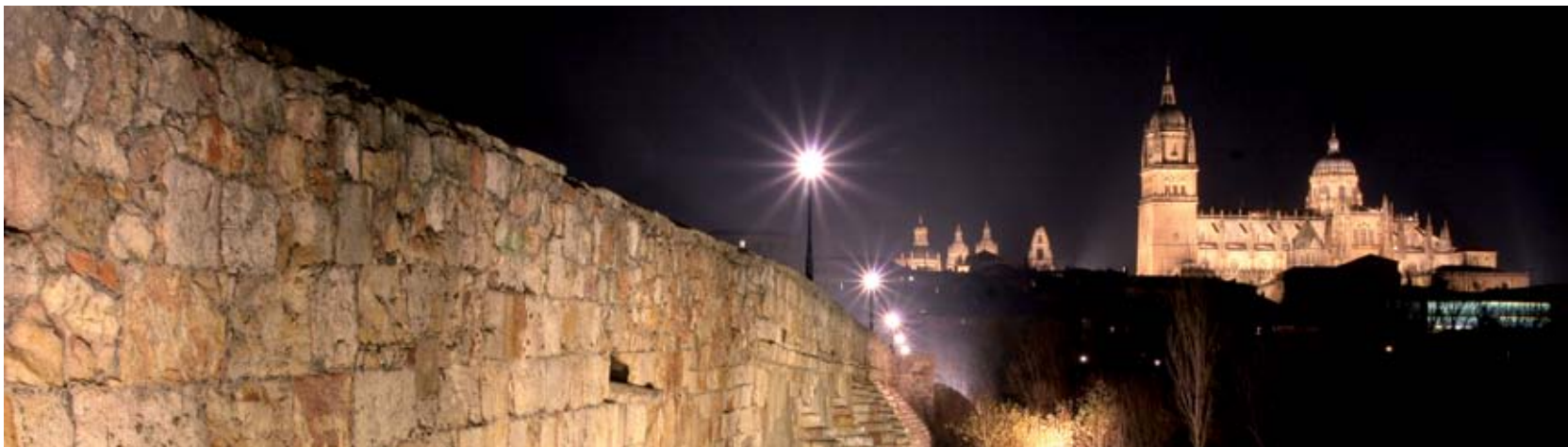
数年前からカテドラルの中世時代の塔で感動的で、オリジナルな展示ツアーを始めました。イエロニムスの名は大司教ヘロニモ・デ・ペリゲアウスに相応しい振る舞いをします。ヘロニモ大司教は11世紀末から12世紀始めのレコンキスタにおいて不可欠な存在で、アラブ人撤退後のサラマンカの教区の再建を任命されました。このようにして、町の芸術と歴史の900年間が始まりました。このツアーは塔に登り、中世の隠れ部屋へまたは、何世紀もの間に崩壊した部屋へと入ります。そこは地下牢や看守の部屋として使われていました。そしてその後、旧カテドラルの内側すべてを覆う二重窓のアルカイデの間へと移ります。そこでは当時の楽器や、典礼書が展示されています。ドキュメントの原本などはトレ・モチャの間で展示されています。13世紀の防衛塔、そのテラスからは旧カテドラルのロマネスクのすばらしい丸屋根と新カテドラルの丸屋根の景色が一面に広がります。そして、町の一部とトルメス川が一望できます。そしてツアーはボベダの間とテラスへと続きます。すばらしい景色と新カテドラルの最上階のゴシック仕上げを眺めることができます。また、高い上段からその威厳のある内部を見下ろすことができます。(www.ieronimus.es)



ジョール採石場からきている鉄と砂でできた不思議な黄金色、それはサラマンカのモニュメントとたくさんの近代的な建物のカリスマと調和しています。何時間もここにたたずんではいたい気持ちと、入り口の向こうには何があるか発見したい気持ちの両方が沸いてきます。南西部では活気のある生活が見られ、朝一番から移動する人で町はごった返します。その理由には観光客が止まるコリージョ広場があることと、文学科の学生たちの通学路になっているからです。また、そのコリージョ広

場には1103年に建てられた町で最も古いサン・マルティン教会のロマネスク様式の原始的な美しさをもつファサードがあります。可延性があるながらも町の年代に耐えている石、それと同様の教会の遠い記憶、サン・クリストバル教会、サン・ベント教会または円筒形のサン・マルコス教会。歴史の旅はたくさんの項目があります。それは大学周辺のマジョール通りに頻りに書かれています。そして今日祝福され、旧市街地は歩行者にとってすばらしい天の恵みとなっています。>





“アナヤ広場の木
 のできる影が美しい建築物に広がる景色は
 訪問者の期待を...”

いているのか、そこでは人の足取りが速まります。一昨夜の大騒ぎ。たくさんのバーやレストランがある中、サラマンカの夜はまるで川が楽しそうに、穏やかに流れるようです。アナヤ広場の木のできる影が美しい建築物に広がる景色は訪問者の期待を裏切らないでしょう。旧カテドラルのゴシック様式の飛び梁と小尖塔の打ち寄せる波の前に、新古典様式の厳粛なアナヤ宮殿の柱があります。そこは常に鮎物の砂の色をして、常に訪問者を驚かします。

すでに太陽の光を浴びて、都市の顔である道標の役目を果たす、カテドラルの丸い塔と共に上へ下へと歩いてみます。そのすばらしい外観に目をくらまされて歩くスピードが速まるのか、それとも、一時間目の授業に遅れそうな語学留学生が速く歩

ひとつじゃなくて、ふたつもカテドラルがあるなんてと驚くことでしょう。ロマネスク様式の旧カテドラルは新カテドラルの後ろに隠れています。学生たちの授業も始まり、朝の日課は

“...正面にあるラ・カサ・デ・ラス・コンチャス
 (貝の家)へと嫌でも向いてしまうでしょう。(...)
 そのゴシック様式のファサードを装飾した貝が隠れているという伝説の宝を見つけられる...”



“そして、今、太陽の光が傾き、再び赤みを帯びてきたとき、金色の石の輝きの中でもう一度全工程をを走りなおしてみてください。川まで行き、残りの城壁を抜けて、ローマ橋からラサリージョ・デ・トルメスの回想、そして、その日初めての夜、照明で照らされたすべての塔と丸屋根を眺める”

スピードを緩めます。時間が経つほど金色の迷路の隅々がよくみえるでしょう。アナヤから下って行くと、ドミニコ修道院の一部にあたり、その回廊も見学できる、ルネッサンス様式の壮大なカテドラルのような面持ちのサン・エステバン教会があります。精神の理解の独創的な方法はドウエニャス修道院の近隣の回廊にも影響しました。グラン・ビアのためのモニュメント的ひらめき。それは前世紀の遊歩道で、現在位置する場所に生まれ、そして今、建物のアーケードに沿って、都会的なスタイルに再現されました。時間が経っても、良いものは過ぎていきません。

大学のプラテレスコ様式のファサードは永遠に立ち続けるでしょう。頭蓋骨の上ののっているミステリアスな蛙探し、これは幸運を意味するといわれていますが、同時に感動を走り抜けることにも似ています。フライ・ルイス・デ・レオンの銅像の側にあるエスクエラのパティオは当時を連想させる空気を漂わせます。エル・シエロ・デ・サラマンカ(サラマンカの空)と呼ばれる美しいフレスコ画はゴシック様式で魅力的なエスクエラス・メノルレスで閲覧できます。彼の教室、博物館になっている彼の家...ウナムノの記憶。リブレロス通り

の狭い外見のすべてがポンティフィシア大学と、もうひとつのカテドラルのように堂々と埋まります。訪問者はその空に向かって上昇したバロック様式に息を呑みます。しかしその視線はその正面にあるラ・カサ・デ・ラス・コンチャス(貝の家)へと嫌でも向いてしまうでしょう。壁中にぎっしり埋まった貝。そのゴシック様式のファサードを装飾した貝が隠れているという伝説の宝を見つけられるものはいないでしょう。貝探しに時間を無駄にするよりも、バーの並ぶメレンデス通りでタバスを満喫するほうが賢い選択かもしれません。そして、今、お昼時、学生たちはワイン巡りに繰り出します。

まだレストランの席が食事の後のおしゃべりをする人でいっぱいな時、計画的な旅行者は中世を再現したコンパニア通りへ行ってみてはいかがでしょうか。そして、モンテレイ宮殿、ウナムノの亡くなった家と彼の銅像、ラ・カサ・デ・ラス・ムエルテスとその謎、プリシマの丸屋根...そして更に、クラペロの塔、コレヒオ・フォンセカ、ウエルト・デ・カリストとメリベア、ラ・クエバ・デ・サラマンカ...そして、今、太陽の光が傾き、再び赤みを帯びてきたとき、金色の石の輝きの>



中でもう一度全工程を走りなおしてみてください。川まで行き、残りの城壁を抜けて、ローマ橋からラサリージョ・デ・トルメスの回想、そして、その日初めての夜、照明で照らされたすべての塔と丸屋根を眺める。カサ・デ・リスギャラリーの暗がりの中に、控えめに金色の光を放つ、色彩の完璧さ。稀な存在の近代アートギャラリー

“カサ・デ・リス
ギャラリーの暗がりの中
に、控えめに金色の光
を放つ、色彩の完璧さ”

で、現在、アールヌーボーとアールデコの絶妙な展示をしています。

まるですばらしい蜃気楼のようにマジョール広場は100以上のライトで強調されます。沢山の人が夕食の前にこの『大きなリビング』で待ち合わせをします。ウナムノヤトレンテ・バジェステルがしていたようにノベルティーでコーヒーを一杯、またはカシノバーで生ビールとパロマ(揚げた豚皮の上にポテトサラダをのせたもの)を楽しんだ後、それぞれの部屋へと戻ります。そして、その後もこの広場・リビングは明かりを灯し続けます。



*** アクセス:**

車でのマドリッド方面からの移動はA-6からN-501へ乗り換え。バジャドリッド方面からの移動はAP-62からN-620へ乗り換え。また電車でも移動も可能です。また飛行機でお越しの場合は様々な都市から便が出ています。マタカン空港はサラマンカまで15キロほどの距離に位置します。

*** インフォメーション:**

www.salamanca.es
観光案内オフィス:
プラサ・マジョール, 32
Tel. +34 923 218 342
e-mail:
informacion@turismodesalamanca.com



サン・クリストバル・ デ・ラ・ラグナ 再発見

初めて基盤目にレイアウトされた都市...
その長い歴史のなかで控えめで、
静かでそして厳粛な人生を歩みました。
そして、農民と職人のほかに、騎士、除隊兵、書記官、
支配者そして聖職者がここに住みました。

ルイス・ディエゴ・クスコイ

サン・クリストバル・ デ・ラ・ラグナ

※ 模範都市



植民地の風は魅惑的で、このテネリフェの歴史的な村のメリットとなっています。そして、カナリア諸島の中で最も勢いのある島のひとつとしてここに健在します。また、この都市のレイアウトは後にアメリカの創立時にその町づくりのモデルとなりました。そして、今も伝統のカナリア建築の彩色主義が強調かつ調和され元のまま残っています。

遠い昔、サン・ディエゴ修道院の修道士たちは町の中心に辿り着くために、押し合いへしあいしながら小さなボートに乗ってラ・ラグナに着きました。そして彼らはそこで用を足し、島の町に建った、たくさんの教会を訪れたといわれています。最終的にその名前が定着した、当時は村の名前だったラグナを通り家路に戻ったそうです。サン・クリストバル・デ・ラ・ラグナは地元の人や外国人に単にラ・ラグナとだけ呼ばれています。すべては季節水のせいで、泥や悪臭そして

蚊が原因となり不快を引き起こし、19世紀に地図から消えました。その後、土地が干拓たことで都市の中心を拡大することができました。その都市の設計は1496年にアロンソ・フェルナンデス・デ・ルゴにより設立されて以来変わっていません。しかし、当時、歴史的転機であったはずのラ・ラグナの創立は、カナリア諸島ではあまり認識されていませんでした。

ルネッサンスそして都市の迷宮の時代、ローマの町のレイアウトの失われた理想を思い出し、そして惜しみました。本格的で古典的なモデルで、そのレイアウトを再開するにはかなりの時間を要しました。ラ・ラグナにとっては大きなメリットでした。当時の革新者は理想的な都市であったギリシャ・ローマ神話の考案を希望しました。それは真直ぐに伸びた道で、すべての人が近隣との共同生活を営みやすいように整理されているという理想都市でした。平和で要塞をもたない都市。結局、フェルナンデス・デ・ルゴが島の海

“...島の町に建った、たくさんの教会を訪れたといわれています”

※ドラセナと月桂樹

このように貿易風によってもたらされる穏やかな気候はラ・ラグナの町、実際にはその家の屋根までもを野生の庭へと変えます。それは特に緑の植物にいえ、湿気がその成長を促しています。雨、さらには『液体の風』は町を囲む山、通りを飾るドラセナ、通りや広場の顔となっているマカロネシアの象徴的な植物、の繁殖を助長します。多くの木々が中心地からわずかな距離のメルセデス山の斜面にそびえ立っています。その山には散歩道やトレッキングコースがあります。また、そこにはいくつかの展望台があり町全体の景色を眺めることができます。これらの全てはアナガ地方公園

のほんの一部です。この公園はテネリフェ島の北部を占めています。伝統的なカナリア諸島の植物の象徴といえます。特に、先史時代の遺跡ともいえる月桂樹が代表的です。ラ・ラグナから5キロほど離れた海岸北部の自然もまた格別です。バハマルとプンタ・デル・イダルゴの村々の周囲では溶岩流により気まぐれに形成された水溜りが暖かい塩水プールとして多くの人に楽しまれています。



抜600メートルで、南への通過点でもある北部の肥沃な平原を選択しました。危険な海岸から離れ、カナリア諸島の先住民グアンチェに恐れ

るは、まだカステジャーナの征服に勇敢に反抗した人々がテネリフェの領土に住んでいました。カナリア諸島のヨーロッパ化は止めることができず、また目的地を確

“...ギリシャ・ローマ神話の考案を希望しました。それは真直ぐに伸びた道で、すべての人が近隣との共同生活を営みやすいように整理されているという理想都市でした”





❁ “しかし、この町をモデルにして造られたアメリカの町にないものは、イギリスを思い出させる窓です。『ベントナス・デ・ギジョティナ(ギロチンの窓)』と呼ばれる...”

立するためにスペイン全土の様々な地方やポルトガル、ジェノバからも多くの人が来ました。ラ・ラグナはこうして島の首都としての役割を定義され、町はすぐに大きくなりました。大西洋の反対側に似たような条件から生じた様相に注意を払った放浪途中のアメリカの人々からよく理解を得ました。現在では、観光オフィスが無料で提供しているツアーのガイドの非常に重要な質問の説明を聞くときのツアー参加者が、かつての彼らのように、その詳細に注意を払っています。常に、カルタヘナ・デ・インディオ、キト、サン・ファン・デ・プエルトリコなどを知っている人がいるものです。それらを知ることで、さらに親しみや感動が沸くことでしょう。フェリ

ペ2世の管理によって雇われたイタリアのクレモネーゼ出身の建築家のレオナルド・トリアニの記録による16世紀の都市の地図があります。しかも、元のままで保存されている！真直ぐな道、交差点、広場... 未来の都市『発明』を考えた建具と信仰。まさしく、世界遺産に値するものです。

しかし、この町をモデルにして造られたアメリカの町にないものは、イギリスを思い出させる窓です。『ベントナス・デ・ギジョティナ(ギロチンの窓)』と呼ばれる大きな、上げ下げ窓で、小さいパネルに分かれていて、枠が白塗りで塗られています。それらはここに定住したポルトガル人にもたらされました。ポルトガルはイギリスとの海のつながりとその多くの影響を受けています。それらは、他の建築物とは違う、カナリア諸島の伝統の建築物です。同様に島の固い松の木で造られたバルコニーもそのひとつです。ファサー

❁ “南部のアデラント広場のように熱帯植物が揺れる...”



❁ “またはサンタ・カタリナ・デ・シエナ修道院とそのアヒメス...”

ドに表現豊かな色合いをつかう特徴があります。エキゾチックで親しみやすい雰囲気を届け出してください。島の北部に湿気と活力を運んでくる柔らかな貿易風と、南部のアデラント広場のように熱帯植物が揺れる砂漠との対照はとてすばらしく、まるで魔法のようです。少し遅く、噴水の周りにつくと、ベンチは甘い時間を楽しむ人で埋まります。そして、観光客はナバ宮殿とその溶岩、またはサンタ・カタリナ・デ・シエナ修道院とそのアヒメス(外に飛出た格子の付いた木製バルコニー)の説明を聞きながら、テネリフェの町が漂わせる、穏やかな安らぎを賞賛し続けることでしょう。とても近いのに、とても離れている島のビーチ。

実際に、諸島の中で三番目に大きい都市にはみえません。というのも、人口150,000人といわれていますが、都市の中心部の人口はおよそ10000人だからです。落ち着いた雰囲気は旧市街地に入るとその魅力

を更に増し、その歩行者道のすばらしさには目を見張ります。いつも賑やかなエラドーレス通りはとても楽しい場所で、そこには毎日の生活とムステリエルやフランコ・デ・カシージャのような世俗的な家の背景があります。ラ・カレラ通りをそよ風のようにブラブラと歩き回ってみると、そこには店やバーが与える本物の雰囲気と、歴史を通じて際立つ後世に続く建物があります。三つの古い貴族の建物は今日、市庁舎、火山石でできた暗い色の石が特徴のカテドラル、そして19世紀の優美なレアル演劇場として使われています。また、象徴的で、圧倒的な背景の中に、カリスマ的存在のコンセプション教会の塔があります。その紛れもない白さで、海の灯台を妄想させます。>

❁ “象徴的で、圧倒的な背景の中に、カリスマ的存在のコンセプション教会の塔が...”





ムデハル様式の屋根をもつ寺院、それらもまたアメリカへと持ち込まれました。サン・ファン・パウティスタ教会のように念入りに細工された教会は、また他の教会を祝福していかのように見ます。アヒメスのオリエンタルな魅力や圧倒的な銀の祭壇のあるクリスト教会にありたてられています。また銀の使い方によってもラグナの寺院が識別できます。信仰のイラストや装飾が施されていたサン・アグスティン教会。火事は大きな損害となり、今日、同じ名前を持つ通りに再構想が立っています。興味深いサン・アグスティン通りは建物の規模が目印となっています。ドローレス旧病院は現在、近代的な図書館になり、レルカロ宮殿はテネリフェ歴史博物館の本部とラ・カサ・デ・モンタニャスになりました。また、ラ・カサ・デ・モンタニャスにはパティオ、椰子の木、しだの木そしてドラセナがあり、たくさんの隠れた面白いささやき

“...生涯を託しました。その学院では巧みな技術でその内容物を旧修道院に並べています”



“ラ・カサ・デ・モンタニャスにはパティオ、椰子の木、しだの木そしてドラセナ...”

が聞こえるでしょう。サン・アグスティンの『空の』教会は、現在のカナリアス・カブレラ・ピント学院にその生涯を託しました。その学院では巧みな技術でその内容物を旧修道院に並べています。現在30000人の学生が通う町を有名にしたその大学の講堂は18世紀に開かれました。そして、ここはナイトライフも盛んです。多くの人が夜の町を満喫します。特にエル・クアドリラテロと呼ばれる旧市街地に囲まれたところが有名です。

7月には農民の守護聖人であるサン・ベニートの村祭りが開かれ、全ての諸島からたくさんの方がやってきます。そして、その祝いは響き渡り、人々のやる気と同じく、次第に公認されてきています。コルプス・クリスティの通りを花びらで敷き詰め、花びらの絨毯を作ります。または、モニュメントのある場所での祭りの由緒あるラ・ラグナのキリストの名譽を印す花火を打ち上げます。この祭りは9月14日ごろがピークとなります。のんびりとした生活とお祭り騒ぎの生活、海と森を近くに兼ね備えた島、テネリフェの北部と、首都サンタ・クルスに隣接する国際空港。間違いなく、ここは21世紀の模範都市です。

※ インフォメーション:

www.aytolalaguna.org
観光インフォメーションオフィス:
カジェ・ラ・カレラ, 7
Tel. +34 922 63 11 94
(ガイドツアー出発点)
e-mail: turismo.laguna@cabtfe.es



サンティアゴ・デ・コンポステーラ 再発見

もし飛ぶ星があるなら、石も同じように飛ぶだろう
斜めに切られた冷たい夜
実れ、双子のユリの大胆さ
成長せよ、奮闘せよ、コンポステーラの塔

ヘラルド・ディエゴ

サンティアゴ・ デ・コンポステーラ

※感動的な道の終わり



ハコベオの道の最終地点、花崗岩と白い窓に感情をかきたてられる迷路。そして、そこは忠実に世俗の真髄を再現している。聖なる町、大学都市、ガリシア地方の町そして、陽気さと、もの寂しさを感じさせる町。そして、そこは神と人間の町。

モンテ・デ・ゴツ(歓喜の山)の笑みと涙。目標を達成することはすばらしく、そして、その最終地点はすぐそこまで来ています。サンティアゴ(ヤコブ)の石像は丘の緑と灰色に白熱する空にそびえ立ち目的地を指差します。丘の展望台から旅の終わり告げられます。信仰者であるかないかに関わらず、巡礼者は宗教的信仰の道としてまたは、個人的な経験として最終目的地まで献身します。感情を態度に示し、目標を達成します。また、同時に今まで歩いてきた何キロもの道のりやその時々瞬間、千期一隅の人々を背後に残し、巡礼の達成を前に懐旧の念を感じるこ

もあるでしょう。全ての巡礼者が残りの下り道を騒ぎ声を立てながら出発します。町へと導く最後の距離は広範囲で水平な道で灯りがともされています。何世紀の間にも渡り、多くの巡礼者を呼び集めている旅はもしかしたら個人的なカタルシスまたは、ただの歴史的に励まされた往來に過ぎないかもしれません。しかし、オブラドロ広場に到着し、初めてその壮大なカテドラルを見つめた

“サンティアゴ(ヤコブ)の石像は丘の緑と灰色に白熱する空に...”



※他のルート、他の方法

歴史の中心であるだけでなく、サンティアゴは『道からでる』という価値がある。聖母ポルタルの礼拝堂があるベルビス地区からの町の景色は美しく、その地区はすでにアバングャルド建築が建てられ、ジョン・ヘイダックの作品であるア・トリスカという文化センターがあります。それは革新的な建築のひとつで、他にはピーター・アイゼンマン、セサール・ポルテラ、J.P.クライフス、マノロ・ガジェゴなどの作品があります。例えば、アルバロ・シサがデザインしたCGAC現代美術館があり、サンティアゴの観光局の企画でウォーキングツアーと称して主題別に工程をたてたツアーがあります。(www.SantiagoTurismo.com) これらの未来の顔を持つ地区と実用的なエンサンチェ地区から離れて、川岸と同じ名前のコレヒスタ・デ・サルは12世紀のロマネスクの建築で斜めに傾いている壁と柱を強調しています。永遠の平和はサン・ドミンゴ・デ・ボナバル修道院で再び開かれます。またそこはポボ・ガレゴ民族博物館の現在の本部になっています。同様に典型的な家々が巡礼の道の一部にかかる古いサン・ペドロ地区には本物の静けさがあり、その緑は広がり町のきれいな景色の公園となりました。それらの公園にはキャンパス・スル、エウヘニオ・グラネル、カルロマグノ、ラ・アルマンガ、ガレラスそして、ラ・グランシャ・ド・シェストなどがあります。

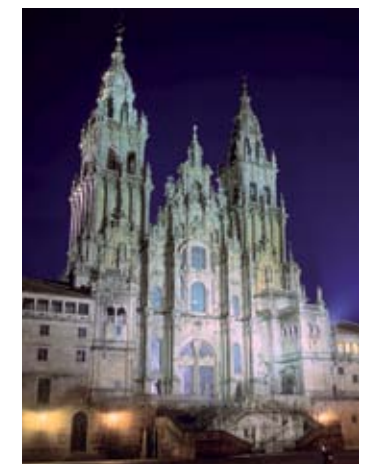


とき、必ずその厳粛さを感じるでしょう。なんて世界は壮大なんだ！

みてください。控えめで上品なゴシック様式のホステル・レジエス・カト

美しい装飾そして青苔によって格式と鮮やかさを調和した花崗岩の格言をふくむ背景のなか、バロック様式のファサードは巡礼者だけでなく、一般の旅行者全てを魅了します。石切り職人がカテドラルのバロック様式のファサードの建設期間に、そこで仕事をしていたことが名前の由来であるこの広場の全てを見渡して

“オブラドロ広場に到着し、初めてその壮大なカテドラルを見つめたとき、必ずその厳粛さを感じるでしょう。”





リコは旧巡礼者病院でしたが現在はパラドールになっています。バロック様式の外観をもつロマネスク様式のヘラミレス大司教宮殿、簡素なルネッサンス様式のサン・ヘロニモ寄宿学校、フランスの雰囲気をかもしだ

“その当時、銀細工師のいた場所でプラテリア広場として親しまれています。また、この広場に面するカテドラルのファサードと時計の塔が唯一残っているロマネスク様式の建築です。”



“そして初めに目にするものは飾り気のないロマネスク様式のデザインを表現したポルティコ・デ・ラ・グロリア(栄光の門)です。”

す新古典主義のラシヨイ宮殿。またこの宮殿は市庁舎として使用されていて、その多くのバルコニーや窓がオブラドイロ広場を活気づけているように見えます。殆どのカテドラルが視覚的に天の恵みを受けていないなか、ファサードの前にある『神のお告げに従って』できたこの広場は多くのテーマ、広々とした空間を兼ね備え、とても価値のあるものになっています。

厳粛の糸を辿るように、左右対称の二本の石段は訪問者をカテドラルの内部へと導きます。そして初めに目にするものは飾り気のないロマネスク様式のデザインを表現したポルティコ・デ・ラ・グロリア(栄光の門)です。そこには有名な音楽家の楽器や過去に存在したものを想像させる、まるで本物を見ているような彫刻がいまだに良い状態で保存されています。儀式に沿い、祭壇の後部にある聖人に抱擁します。そして時間

“フランスの雰囲気をかもしだす新古典主義のラシヨイ宮殿。またこの宮殿は市庁舎として使用されていて、その多くのバルコニーや窓がオブラドイロ広場を活気づけているように見えます。”

が合えば大きく揺れるボタフメイロを見物できるでしょう。以前はカテドラルのミサに集まる多くの巡礼者の悪臭を消す目的も含めて使われていました。何世紀にも渡り巡礼の舞台となっているこの場所で時間のめまいを感じるのも楽しみのひとつでしょう。心の中を映し出すドキュメンタリーやイメージなどで使われるものなどは回廊にある大聖堂博物館で見物できます。そして、そこでは永遠が理解できるでしょう。

常にメランコリアでいたロサリア・デ・カストロの感情だけで町を見ないで下さい。優しく、楽しいノスタルジアはサンティアゴの花崗岩できた建物から発せられています。カテドラルの石の屋根からは雪のように白いフレームの窓を持つ家々を眺めることができます。ご存知のように地球の温暖化で気候が変わってきています。そして、ここでも同様に雨が少なくなり、太陽をのぞかせる日が増えてきています。そのため、カテドラルを囲むほかの広場のファサードは膨れているように見えます。しかしその太陽で文学の薄暗さが全てかき消されることはありません。通りや広場では永遠に歌を歌い続けるトゥナの周りに多くの観光客が集まります。巡礼者はサンティアゴに到着し最後にキンタナ広場とプエルタ・デ・サンタを訪れます。カテドラルからアクセスできるもうひとつの広場に、アサバチェリア広場があります。またその正式名称はインマクラダ広場です。そこは中世時代の散歩道でテーブル並べられて、多くの商人がいました。特に靴が多く取引されていたとのことです。その当時、銀細工師の

いた場所でプラテリア広場として親しまれています。また、この広場に面するカテドラルのファサードと時計の塔が唯一残っているロマネスク様式の建築です。カルバジヨの橋から吹く心地よい風、そしてビジャール通りではどんな賑わいが待っているのだろう。なんて気持ちがいいのだろう！

花崗岩の魔法とサンティアゴの特徴でもある大きな窓、パソと呼ばれる小さな宮殿や教会、一列に並ぶ贅沢なつくりのガリシア仕上がりの家々を抜けて道を歩き回ります。食欲をそそるレストラン、流行のショップ、人の集まるバー。どこに入ろうか？どの角を曲がってみようか？それはもう精神的な旅行だけでは収まりません。ここにはそれ以外にも重要な多くの

“そしてビジャール通りではどんな賑わいが待っているのだろう。”





楽しみがあります。ノバ通り、フランコ通り、レイナどおり、オルファス通り、プレグントイロ通り、狭いエントレムラス、トウラル...このすばらしい音の行列はここを囲う名前です。ガリシア風蝟とリバイロ（ガリシア地方の白ワイン）どちらも見逃すことのできない絶品です。アメアス通りにある、アバスト市場で売られているガリシアの海産物、その他のこの土地でできる全てのものはとても新鮮です。食事の時間は、この世の喜びの時間です。

午後になり、まだ雲が残る中、太陽の光が広がります。あっちに行ったり、こっちに行ったり、ここでは散歩はある種の情熱です。ベネディクト会の伝説そして、ほぼエル・エスコリアルと同じ大きさであるサン・マルティン・ピナリオ修道院、教会、博物館や、ロマンチックでパノラマの広がるアラメダ公園まで歩いてみるのはどうでしょうか。ここは、9世紀ローマ時代の集落と異教徒の霊廟があった遠い時代、サンティアゴ（聖ヤコブ）の墓としてよく知られていたそうです。彼の活躍は口承伝承でフィニステレでの布教と使途の殉教の話が伝えられています。こうして全てが始まり、こうしてここがヨーロッパのキリスト教とその生活の中心地となりました。そして教会の数がどんどん増えました。サン・パイオ、サン・フランシスコ、サン・フルクトウソ、アニマス...そして教育を得る場所もつくり

ました。ホールやすばらしい回廊のある、現在では展示会場として使われるフォンセカ寄宿学校が大学の始まりとなりました。このようにしてモダンなラインがつくられ、同時に新市街地も生まれ、アバンギャルドな建築物のコントラストが出現しました。この町は数十年前からガリシア州の州都として、かつてないほど生き生きとしています。未来は夢ではありません。

夜がくると静かになり北部の霧がふれ出します。そして、その様子を街灯の光のもとで綿を見るようにみつめる。週末の夜、町は大勢の人で賑わいます。そして嫌なことも霧にして消してしまうかのようです。大聖堂の塔もまた霧をかすめます。オブラドイロ広場全体がぼんやりとしたライトの光で染められ、まるでおいてきぼりをくった巡礼者の夢物語の一節のようです。旅が終わることに抵抗する。そして、その感動は消えていく。



* アクセス:

サンティアゴの空港(ラバコジャ空港)には国内線・国際線と多数の便があります。(www.aena.es). また電車やバスでの便もあります。(電車:www.renfe.es バス:www.tussa.org). また、高速道路を使い車での移動も可能です。

* インフォメーション:

www.SantiagoTurismo.com

観光センター:

ルア・ド・ビジャール, 63
Tel. +34 981 555 129



セゴビア 再発見

セゴビアの町を目にする観光者のビジョンには、この町にあるすべてのモニュメントが交差する。古城、教会、アーチ、先頭アーチ、塔、祭壇などで心が満たされる。想像力、まばゆい輝き、そしてその思い出はすばらしさを増してゆく。その敬服には簡単に秩序や静かさを当てはめられるものではない

アソリン

セゴビア

※ 唯一の特徴をもつ場所



❁ 中世の古道を交差するローマ時代の水路橋、中央ヨーロッパの古城を思い出させる城塞、スピリチュアル的なロマネスク様式の教会、力強い山脈とどこまでも続く平原。カスティーリャは他と違った特別な町。

これがセゴビアへの最初の旅であるかどうかは関係ない。ローマ時代の古い建築物はその高さと忍耐強さで私たちに魅了する。モルタルを使わず、ひとつひとつ組み合わされた魔法の石は2千年の間その偉大さを私たちに見せつけてきた。一昔前まで町に水を運ぶ方法として使われ続けてきた水路橋が世界にあるだろうか？セゴビアの住民たちは毎日この前を通り過ぎているが、その驚きが耐えることはなく、こ

の町の紋章にもこれを目にすることができる。耐えることのない驚きと敬意をもってそれを臨む。この水路橋のおかげで1985年にこの町は世界遺産に指定され、そして現在は2016年のヨーロッパ文化都市として申請中である。

ローマ時代のこの建築物は西暦1世紀に建てられたもので、コンスエロ・ポスティゴの階段を上るごとに違ったビジョンを提供してくれる。アーチが見えなくなるここから、水路は歴史地区に含まれる。そして最後にはカスティーリャの質素な平原を望むおおきな窓のように見えてしまう。エレスマとクラモレス川の上に聳え立つのはもうひとつのモニュメント、アルカサルである。要塞はケルト遺跡とローマ時代のシタデル遺

❁ “もう一度見上げたくなる水路橋”



❁ “エレスマとクラモレス川から見上げれば、偉大なモニュメント、アルカサルがある”

跡跡地に建設されたと思われる。いくつもの修復工事が行われ、父、カルロス1世の若かりし時代に装飾したドイツの古城と似せるためにフェリペ2世が建てたものである。粘板岩の先頭アーチと屋根はカスティーリャの要塞と化し、その美しさを君臨させる。

アルフォンソ10世王、トラスタマラ家が力を持った時代はその後、イザベルカトリック王の時代へと移行する。1862年に起こった火災後、完全に修復されたサロン。そして後に監獄と軍隊養成

❁ “山脈を背景にした町にかけられた魔法”

所として利用された。歴史の気まぐれは見学の楽しさを反映し、ホワン2世の塔が町を見下ろしている。国全体、カスティーリャ・イ・レオンの町の観光名所である多くの塔。ピナリーヨ、ふたつの川を結ぶ丘の斜面、サマラマラ地区、ベラクルス教会などを取り囲む風景。13世紀に聖スブルクロの命で建てられた教会。魔法のような魅力がこの周辺を守っている。

アルカサルだけが、塔と小道のプロローグである。城壁によって隔てられた歴史のストーリーはその3キロの周囲にその力を秘めている。その中には5つあったうちのサン・アンドレス、サンティアゴ、そしてサン・セブリアンの3つの扉が残って



※ユダヤ地区の思い出

セゴビアのユダヤ地区は13世紀から特に広がりを見せる。イスラム教徒たちと同じように、制限された地区への居住が強制される。セゴビアの場合はアルムサラの旧食肉処理場からサン・アンドレスの扉まで続く、城壁までの制限された地区。この歴史地区の南、入り組んだ小道とレンガ造りの家々の中にユダヤ人街はある。中世のユダヤ人居住地区の中心は現在のフデリア・ビエハ通り。そして現在ではキリスト聖体教会となっている中央シナゴグ付近にある。同じ道を行くと、1492年に追放されるまでの間に最も重要なユダヤ人として活躍したアブラハム氏の邸宅へと続く。ここは現在ではユダヤ人街学術センターとして利用されている。その時代、もっともにぎやかであったと考えられている現在のバリオヌエガ通りにはセムエル・デナンの家があり、昔の姿がそのまま保存されている。5つあったシナゴグのうちのひとつには、学校が建てられ、フデリア・ビエハやフデリア・ヌエバ通りからあまり遠くはない。一番古いシナゴグは現在のメルセ広場にあったアルハマ通りとアルムサラ通りのすぐ近くに存在していた。



“塔、小道、歴史のプロローグは間違いなくアルカサル”

いる。道は迷路のように続いている。記念碑的な建造物、そして伝統的なカスティーリャのファザード。また、他のカスティーリャ地方にある家とは違ったセゴビアの家も特徴的。装飾性が強まったり、ファザードには幾何学的な装飾が施されている。1525年に建造が始まったゴシック様式の建造物。

1474年にカスティーリャ女王、イザベル1世の戴冠式が行われた場所は現在の広場になっている。カフェやいくつもあるテラス。居住と観光の共存。観光客たちは、ロマネスク



“カスティーリャにある他の家屋とは違った、装飾性の強い特徴を持つセゴビアの家々”



様式の教会が多々あるこの地を見学するためにカフェで長居をしてはられない。ムデハル様式の塔があるサンティシマ・トリニダ教会。間違ってしまう町シルエットを構成している保存状態のよいサン・エステバン教会。ハカ大聖堂の原型となったサン・ミラン教会。サン・フスト教会、サン・ホワン・デ・ロス・カバイェロス教会とその血縁者たちの墓も一瞥の価値あり。

騎士と王たちは、カスティーリャ女王、イザベル1世の異母兄弟エンリケ4世の避暑地があり、ゴシック、ムデハル、そしてプラテレスコ様式のサン・アントニオ・レアル修道院の広間に思いをはせる。同じ王がまだ皇太子時代の15世紀にその建築を命じたエル・パラル修道院。異なる生活様式の思い出は、ベラクルス

教会近くにホワン・デ・ラ・クルスが設立したカルメリータス・デスカルソス修道院にある。そしてホワン・デ・ラ・クルスの遺体は墓に安置されて、散文や詩から遠ざかっている。カサ・デ・ロス・ピコス、アリアス・ダビラの塔、ロンヤの塔、そしてカサ・デ・ラ・モネダで生活していた人とはどんな人たちなのか。アントニオ・マチャドが3年間生活し、現在彼の博物館となっている家にはどんな詩が日常聞こえていたのだろうか。

現在の生活が、いつの日か空をこだますることは想像しがたい。しかしそのときはいつか来る。それまでの間は現在



“大聖堂を飾りあげる多種多様な装飾方法...”





“たくさんのフェスティバルが楽しめる(操り人形の国際フェスティバル)”

のセゴビアを散策する。そこはマドリッドから簡単にアクセスできる距離。ここではまた、フェスティバルも多く開催されている。ティティリムンディ(操り人形の国際フェスティバ

ル)、フォークセゴビア、サマーミュージカル...。そして常に独自の生活と観光客の生活がある。レアル通りを午後にショッピングで楽しみ、ホセ・ソリーリャ、マヨール広場ではタパスを、サン・ミヤン地区ではビール、またディスコ、クラブ街で夜の街を楽しむ。水路橋はライトアップされ、それをもう一度見上げたい。

“そして終わりのない夜が続く...”



※ アクセス:

マドリッドからバスか車でA-6からAP-61またはN-603へ。
電車では普通列車かAVEで30分。

※ インフォメーション:

観光案内センター:
アソゲホ, 1. 40.001 セゴビア
Tel. +34 921 466 720

info@turismodesegovia.com
www.turismodesegovia.com

予約センター:
Tel. +34 902 112 494

info@reservasdesegovia.com
www.reservasdesegovia.com



タラゴナ 再発見

私のように色々なものを目にしてきた人間にとってありがたいと思えるのは、親友、親切で懸命な人々、そして静けさをもつ町である

P. アネウス・フロルス

タラゴナ

※ 地中海にあるローマ遺跡



スペイン史において重要な役割を果たした大都市、古代タラコは現在でもカタルーニャの中心部となっている。その重要な遺跡は、はるか昔の歴史を秘めて地中海の青色に染められながら、穏やかな気候の中で重なり合っている。

隣接するテーマパーク、ポルト・アベントゥーラのアトラクションと街への見学は、宝探しのような散策。出会う小道で隠されたヒントやサインを見つけ、はっきりとした要素を注意深く観察し、それらを遠い昔に思いをはせる材料とする。その結果、ローマ時代のタラコの町を鮮明に再



現することができる。地中海帝国がイタリア半島以外の地に建設した最初の都市のひとつ、タラコの町。平和な日常、やしの木、街角、そして海に面した毎日と光を持ち合わせた、地中海の典型的な町の顔が作り上げられた。

2000年に世界遺産として指定されたタラコを「発見」する前に、パジョール広場にある、紀元前2世紀のものと思われるパジョールのヴォールトなど、ローマ時代の都市モデルをいくつか目にしておくことが重要だろう。そこは、不思議に見せられた者たちと労働者たちの歴史が秘められた場所。丘の上に建つ神殿での祭事や円形競技場は、紀元前3世紀のローマ時代の鍵、第二次ポエニ戦争の化身となっている。この場所は現在、マヨール通りを照らす力強いバラ窓とゴシック様式のファザードを有するサンタ・テクラ大聖堂の一部になっている。

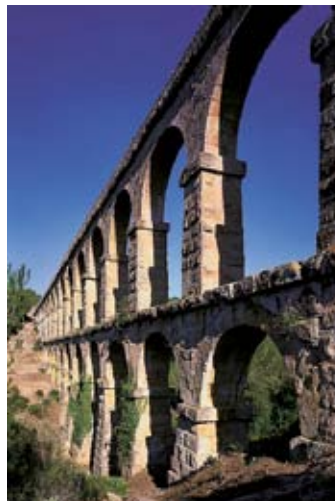
カテドラルの内外部にある回廊、司教区博物館、ロマネスクとゴシック様式の典型的な粗面仕上げと元来の壁面に刻まれた浅浮き彫りのレリーフ。旧市街には家屋や店が数多く見られる。カテドラルと同じ広場にゴシック様式の窓を広げるベルセルスの家には何があるのか？と誰も

“サンタ・テクラ大聖堂のゴシック様式ファザードのすばらしいバラ窓はマヨール通りを照らす”

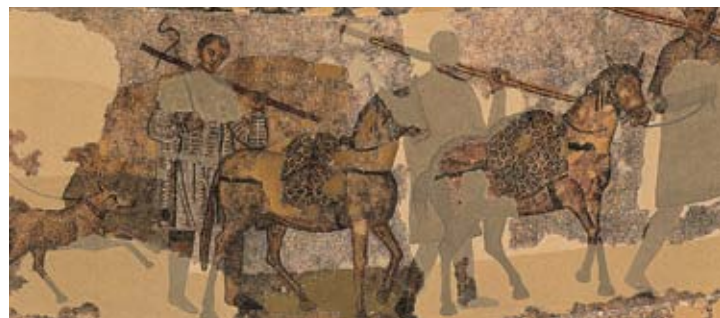


※ 外壁の宝

タラコは古代タラゴナに存在するだけでなく、そのすべての地域にローマ時代の文明を残してきた。4キロ先にあるレス・フェレラスの水路橋は、二重アーチで、フランコリ川から町に水を運ぶ壮大な建設工事の残骸の一部。観光名所であり有名なベラ・アーチは20キロ離れたロダ・デ・ベラ市に位置する。スペイン全土をつないでいた交通路、ビア・アウグスタ上に建てられたエレガントかつシンプルな建造物。6キロ離れた国道340号線にあるエシピオネスの塔は、ローマ時代の都市を結ぶ道路上によくあった共同墓地。ラモラ・ビーチに位置し、タラコを建設するための石が採掘されたメルの採石場も観光名所だ。ここには、採掘の高さを測る針が保存され、微気候により緑が豊かな場所でもある。町の郊外とフランコリ川の川辺では西暦3世紀にできた原子キリスト教の共同墓地を目にすることができる。ここには、パーク・セントラル・ショッピングモールにその残骸が飾られているバジリカがある。タラコを取り囲んでいた多くの農村地帯、エル・ムンツの遺



跡、アルタフツリヤの町、そしてセン・セレスにあるコンスタンティを見学することもできる。





“観光者たちを魅了する、ローマ時代の城塞は住民たちの誇りである”



古いバルコニーを目にすることができる。これらの幅の狭い道ではシンボルが入り組みあい、まるで迷路の博物館のようだ。

街のパトロンである聖マギーの狭い道やカレル・デル・コンテ、その他の多くの道は修復工事によって命を取り戻した。老舗の店や新しいデザインのレストランが楽しめ、イスラム教徒の侵略により村人たちが追いやられたようなつらい歴史にもかかわらず、古代タラコでは何百年も後もその生活は続いている。ローマ時代の城壁は今もそのままの姿を残し、その力は衰えることはない。タラコの城壁と塔は元来の城壁の4分の1が残っており、1キロ以上続く塔はイベリア半島にあるローマ

が思う。そこで何があったのか？街角を曲がったところにある技師の家の19世紀のファザードはローマ時代の主祭壇の一部を残している。特にヘブライ語で書かれた中世の棺もあり、その平和と静けさを保つ



“地中海の青に映える円形競技場”



“円形競技場の地下に存在した場所を、壁面とヴォールトが精密に再現”

建築物でもっとも最古のもの。石の基盤はローマ時代の最初の軌跡を構成しているようだ。特徴的な黄金色の切り石の特徴はこれを作り上げた労働者たちのサイン。塔は、この簡素で庭のような道順を導く。中世の要素を含んだ浅浮き彫りのレリーフと元来の文字が刻まれているミネルバとカピスコルは、永遠の命と歴史の目撃者。

城壁は多くの場所にそのシンボルを残してきた。パジョル広場、集会場、そして建物の一部の外壁アーチとして。タラゴナがその重要性をなくしたわけではない。中世の城壁、ムライエタに響くこだま。セダッソス広場を照らす偉大な城壁の明るいシンボル。メルセリア通りに表れる現地の色彩。縦長のフロント広場には、足を休めるたくさんのテラスがある。しかし、過去の足跡が雨のように休みなく降ってくる。いくつかの遺跡はこの広場でも目にすることができる。頂点と注目の的となった場所。西ヨーロッパでもっとも状態のよいローマ時代の遺跡のひとつ。城壁やヴォールトは円形競技場に位置するこの娯楽場所を再現している。プレトリオの塔などへアクセスすることができた、レイ広場にある歴史博物館の一部はシンボリズムの象徴である。その屋上からは町と海の景色を一望することができる。タラコの発見、その探求は終了した。

円形競技場の背景には地中海が望め、原始キリスト教とローマ時代のその他の教会の遺跡がある。そこで開催されていた娯楽は多彩な色で美しかったであろう。タラコは古いタラゴナに存在していただけではない。このすべての地域でローマ文明は存在の糸を残した。4キロ先の場所にはレス・フェレレスの水路橋があり、2倍にもなる二重アーチがその>

“縦長のフロント広場にあるテラス”





“海からの光と幸せが、今日の地中海の散歩道を照らす。幅広いランブラ・ノバに建つロジャー・デ・ラウリアの像”



空間を支えている。これはフランコリ川から町へ水を運ぶ壮大な建築物のひとつ。ロジャー・デ・ラウリアの銅像はランブラ・ノバに建っている。メトロポル劇場やカサ・サラスのモデルに間違ふことができないランブラ・ベイヤの代わりとなったカタルニャ都市化のシンボル、ランブラ・ノバ。18世紀のカテラナウとカナイスの家の、タラコの魂を持ち合わせた姿。同じ時期、いくつかの要塞は町とその港の防備を固め、カルロス4世王とその妻、マリア・ルイサ・デ・パルマによって新しく開かれた。

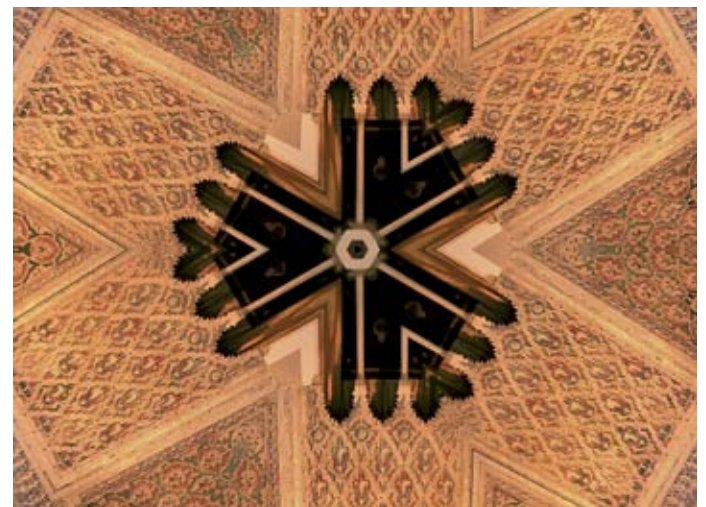
今日、それらの現代の化石は水平線に広がり、改革が行われた地であることを伝えている。観光的なこの沿岸は、タラゴナの静かさを変えないために町から十分離れているビーチ。しかし同時に、それを楽しむには十分近くに位置する。バルセロナの圧倒的な国際性と同じで、遠くて近い。町に続くジャルガ・ビーチが森に囲まれているだけとは誰が言ったのだろうか。遊び続けながらローマ人たちは船で地平線を渡ったのだらうと思いをはせる。

※ アクセス:

Renfe のAVE で。
(tel. +34 902 240 202, www.renfe.com) マドリッドからバルセロナまでの停車駅は Camp de Tarragona です。

※ インフォメーション:

www.tarragonaturisme.cat
観光案内所:
カレール・マジョール, 39
Tel. +34 977 250 795



トレド 再発見

どの場所からもトレドは驚くべき魅力を秘めている

オルテガ・イ・ガセット

トレド

* 忍耐の歴史



絵はがきの永遠のモデル、曲線を描く壮大なタホ川。
1986年から世界遺産に指定された、3つの文化の街
は息づく歴史のラビリンス。



丘の展望台、深い青い空に浮かんだ古都トレド。その風景は現実のものでも抽象的な何かを秘めている。写真や映画で何度も見た風景が大きくされた、まるでグレコの絵画のように…。嵐を予兆する雲と象徴は、これから広がってゆく。その魔法は永遠に続き、グレコが描いた風景は4世紀後も同じである。駆り立てられた情熱を絶やすべきではないことが体の内側から理解できる。



タホ川は湾曲を描きながら旧地区へと流れ込み、

“ゴシック様式の塔をもつ歴史あるサン・マルティン橋を使って川を渡る”



“今日、ここを訪れる観光客たちは迷わないように地図を片手に散策する”

人々は展望台から望む風景に魅了される。どこからそれは来るのだろうか。ピサグラの扉で封じられた城壁には静けさが広がる。その塔や装飾はアラブ文化から持ち込まれたもの。イスラム様式のプエルタ・デル・ソルへ上ると「3つの文化」を感じ始める。最も歴史的なゴシック様式の塔をもつサン・マルティン橋、あるいは18世紀のアーチとカトリック両王によって修復された塔をもつアルカントラ橋を使って川を渡ることができる。斜面を下るとまるで景色の中へ吸い込まれていくようだ。

ラビリンス。一定の法則なく続く道や小道を表現することばは「迷路」以外の他にない。照りつける太陽の光を受けるファザード、ひさしがぶつかりそうになりながら日陰をつくる屋根。当時のアラブ人たちはこのようにして町を作ったのだ。家や中庭は皆が集まる憩いの場であり、通りにはあまり人がなかった。このため、今日見られる観光客たちは地図を見ながら迷わないようにこの場所を散策する。住民たちは訪れる人たちの波に遭遇しないよ

うに、しかし一番早く町の中心地、ソコドバー広場へ着く道を知っている。トレドのベスティアス市場は宗教裁判が行われ、闘牛、そして様々な抗議デモが開催されるカステーリャ・ラ・マンチャの中心地であった。今日ではパールやレストランが軒を並べている。キリスト聖体の祝日には、この広場がガラリとその雰囲気を変えることを、あるパールの店員は教えてくれた。

時代の流れを体感することができる山車を見学することは、モニュメント性を持ち合わせた小道、建物、広場など、町をめぐることと変わりはない。アルカサルは永遠の城塞。ローマ人のとりでとアラブ人のアルカサーバ、カルロス5世が自らの住まいにするためその改築を開始したが、それがマドリッドの貴族たちの

“ラビリンス。一定の法則なく続く小道を表現することばはこれ以外にない”



“...大聖堂のゴシック 装飾は必見”



住まいになることはなかった。戦争で破壊されるまでそれは、監獄と兵舎として利用されていた。そして今日ではタホ川を望む風景の一部と化している。庭に広がる地平線は、不規則な小道にかすかな光を投げかけ、元病院で、今日では考古学的発掘物やアーティストたちの作品が展示されているサンタ・クルス美術館を照らし出している。道の木陰に入り、市役所がある広場へと目をもどす。光を取り込むためにまるで無理やり空間を作ったようだ。そしてゴシック様式のカテドラルが目を引く。空を見上げるのは容易ではない。大聖堂の鐘楼を手にとろうとするが、それは信仰の問題。最も明白ですばらしいのはその美しさ。

信じる神は違っても、目にする空は同じである。希望ということばに違う名前をつけたとしても、信じるものは同じ。それはユダヤ教、イスラム教、そしてキリスト教が共存したこの地が最も理解していることである。トレドにあるユダヤ人街の歴史は長い。カンブロン扉とタホ川の間でイスラム教徒とキリスト教徒は生活し、繁栄した。16世紀に町に存在した九つのシナゴグのうち生存しているのは二つ。歴史と思い出を伝えるけるには十分な数だ。13世紀のシナゴグ、そして15世紀に教会として利用されるようになったサンタ・マリア・ラ・ブランカのアーチが作り出す幻想的な雰囲気。14世紀には、ユダヤ、イスラム、キリスト教が混合され、それらがほとんど同一のものであるということを伝えるトランジト教会が建てられた。

クリスト・デ・ラ・ルース・モスクにその装飾はととても似ていて観光客を魅



了する。999年に建てられたこのモスクは教会として利用され、今日ではトレドのイスラム教のシンボルとなっている。サルバドル・モスクとトルネリアス・モスク、ドンセイヤ学校の広場など、イスラムの影響はここに見られる。ローマ時代の石に光を照り返すアマドル・デ・ロス・リオス広場やヌンシオ・ビエホのヴォールト、そしてサン・ロマン



“アルカサールは 永遠の要塞”



*コベルティソ、パティオ、そしてシガラレス

トレドが隠れた空間に作り出す、その狭い小道を通れば、開いた扉から覗く中庭に注目せずにはいられない。光が照りつける空間は、あるときには鉢に植えられた緑で飾られている。それはすべて狭い小道と対比するもの。アルフィレリートの通りとして知られている。中庭があってもなくても、多くの通りはその個性にあふれている。アルキーリョ・デル・フディオが手がけたアンヘル通り、ディアブロ通りやロハス劇場裏にある、「秘密」の名を持つ通り、そしてトレドの散策コースの典型的な例はクエスタ・デル・アギラ。サント・ドミンゴ・エル・レアルのようにコベルティソと呼ばれるものもある。最も長いコベルティソのひとつ、夜の集会場所、サン・ペドロ・マルティル、そしてサンタ・クララの人気スポット。フエンサラダの宮殿のように町の中の展望台を探せば光が見つかる。そして郊外にはシガラレスと呼ばれる古い村の土地、イスラム教徒たちの集った家が現在ではホテルとして利用されている。



教会博物館では簡素であるが力強い西ゴート族の宝石を目にすることができる。スペインを追われたユダヤ人の思い出、カトララ修道院のセファルディ博物館には何世紀も後に発見されたトレドからの発掘物が展示されている。

王の神殿としてイザベル1世によって選ばれたサン・ホワン・デ・ロス・レイエス修道院に足を運んだものは誰もが、ムデハル様式とゴシック様

式の融合はすばらしいと感嘆する。トレドは女王の好む場所を絶えず有していた。それからずっと後もロカ・タルペヤの絶壁からタホ川を望む場所に美術館を持つ芸術家、ビクトリオ・マチョをも魅了した。サント・トメ教会に飾られている「オルガス伯の埋葬」を描いたエル・グレコにとってもトレドはインスピレーションの場所であった。生から死への変化、そして天界の姿を描いた作品。>



“シナゴグとして建てられたサンタ・マリア・ラ・ブランカのアーチが作り出す神秘”



観るものすべてを神秘的な世界へと導いてゆく。また、当時の生活と姿を再現した博物館には、パイエの展望台から描かれたビスタ・イ・プラ

ノ・デ・トレドが飾られている。体の内側からその景色を知り、理解できる。歴史の教えと調和をなす建築物はこの世の奇跡である。



“サント・トメ教会に飾られているエル・グレコのオルガス伯の埋葬は、トレドを訪れたときのインスピレーションから描かれたもの”



*** アクセス:**

マドリードから高速道路 AP-41、または国道 A-42 で。

あるいは AVE (www.renfe.es)、バスでもアクセス可能。

*** インフォメーション:**

www.toledo-turismo.com

観光案内所(市役所内):
プラサ・デル・コンシストリオ, 1
Tel. +34 925 254 030

観光案内所「カサ・デル・マパ」:
プラサ・デ・ソコドベール, 6

ウベダ 再発見

「冬の、青く突き刺すような寒い12月の朝、白壁や塔の家の黄色い壁を照らす凍りつくような太陽の光を覚えている。城壁の上から、深い絶壁と果てしなく続く世界、段々畑、オリーブ畑の丘、遠くでちらちらと光る川、深く青い山脈、壊れた彫像のようなアスナイティン山を眺めた時、目が眩んだのを覚えている。」

作家アントニオ・ムニョス・モリナ

ウベダ

＊ アンダルシア・ルネサンス



アブド・アッラフマーン2世(822-852)によって建設されたMadinat Ubbadat Al-Arab(アラブ人のウベダ)は、現在も残っているイスラム建築である。中世都市の境界として囲まれた城壁の内部にあり、現在この城壁は歴史地区の境界としての役目を果たしている。

町の構造は、メディーナに分割されていて、現在はコレヒアータ・デ・サンタ・マリアがあるイスラム教寺院と、プラサ・デル・メルカドが設置されているソコ、そしてアルカサルに繋がる要塞化された地区と城壁外の地区に分けられた。

ウベダを散策するとアラブ人時代の素晴らしい建築様式に出会うこ

とができる。城壁で囲まれた構内にあり、アラブ構造の景観を維持し伝統的イスラム陶器を守り続ける職人が住むサン・ミジャン地区への入り口に位置するプエルタ・デル・ロサル。14世紀の建築以来、1964年に修復され、現在は考古学博物館として、先史時代からウベダのイスラム時代までの重要な遺品が展示されているカサ・ムデハル。そして忘れてはいけないのが、フェルナンド3世のレコンキスタである。彼は、異なる人種(アラブ人、ユダヤ人、キリスト教徒)が共存できるよう協定を結び、このことがこの町の形成を決定付けたのだ。

素晴らしい建築物があるにも関わらず、アラブ系スペイン人の作家Al-Saqundijeseは、この町が有名であるのは踊り子と小山があるからだと言っているのは興味深い。それにはこんな逸話がある。フェルナンド3世が、最高位指揮官の別名『モ



“その感動は町の至る所にあり、歴史地区を歩けば、突然素晴らしい建築物や伝説の名残り、そして有名なファサードに遭遇することができる。”

ソ』と呼ばれたアルバル・ファニェスに、町に近い丘の一つを監視するよう命令したことがあった。しかし彼はそこで美しいモロ人の少女に激しく恋をしてしまい、任務を遂行することができなかった。次の朝、王は彼の前に現れたアルバルを叱責したが、彼はすぐさま「ウベダの丘のせいで迷ってしまった」と答えたという。

重要遺跡都市として認められているウベダは48の顕著な歴史的建築物と、100以上の重要な建物を保有している。その内、9が国の文化財、19がBICに登録されている。このことから「驚くべきウベダ」「イスラム女王のウベダ」「慎み深いウベダ」

等、高い評価を受けている。ウベダの町は訪れる者誰をも感動させる素晴らしい町なのである。その感動は町の至る所にあり、歴史地区を歩けば、突然素晴らしい建築物や伝説の名残り、そして有名なファサードに遭遇することができる。

エウヘニオ・ドルスはウベダを訪問した後、この町について「イタリア北部の聖地であるフェラーラやブレシアに移動したようだ」と記述している。彼は、ブルジョアジーの権力と富、そしてウベダ貴族の威厳を反映した建築物を前に、ウベダの町が16世紀のイタリアを統治した新しいスタイルの有名な建築物に匹敵することを疑わなかった。 >





社会生活は、フィホスダルゴス(上流階級)、聖職者、平民の3つの階級に分かれていた。平民階級は人口の大部分を占め、唯一の生産層でもあった。少数の特権階級は農業や牧畜の地所を持ち、町の統治権も保有していた。また聖職者は町の重要な地位を占め、多くの土地を持ち、3分の1の税金を領収していた。この町には11の教区が存在していた。サンタ・マリア教会、サン・パブロ教会、サン・ペドロ教会、サント・ドミンゴ教会、サン・ロレンソ教会、サント・トマス教会、サン・ミジャン教会、サン・ニコラス教会、サン・インドロ教会、サン・フアン・パウティスタ教会、サン・フアン・エバンヘリスタ教会である。トリニタリオ会、メルセス会、フランシスコ会、ドミニコ修道女会、ミニモス・デ・サン・フランシスコ・デ・パウラ会、イエズス会、カルメル修道女会、オスピタラリオ会、第三回フランシスコ修道士会、ドミニコ修

道士会、カルメル修道士会は町の宗教的権力を分配していた。

この当時、ウベダの貴族は重要な国や教会の官僚職に就いており、特にコボス・モリナ家は重要な役目を果たしていた。フランシスコ・デ・ロス・コボスはカルロス5世の宮廷秘書を務め、当時の最高位の称号である「アデランタード・マジョール・デ・レオン」や「カバジェロ・デ・ラ・オルデン・デ・サンティアゴ」等を持ち、富を築き上げた。フアン・バスケス・デ・モリナやディエゴ・デ・ロス・コボスもまた彼の後を追ひ、ウベダの町に当時活躍していたシロエ、バンデルビラ、ベルゲテなどの16世紀を代表する重要な建築物を残した。これは後、ウベダの町を形成する先駆けとなった。

ウベダの町にとってルネサンスは自然な流れであり、国王カルロス5世



“町の南にはスペインで最も美しいと呼ばれる広場の一つ、バスケス・デ・モリナ広場がある。そこにはレコンキスタの重要な建築物がいくつかある。”



の華麗な時代との結び付きにより、アンドレス・デ・バンデルビラのような多くの偉大な芸術家を輩出した。彼らのヒューマニズムに基づいた思想はバスケス・デ・モリナ邸のように宮殿、教会、修道院、広場などに見ることができる。

町の南にはスペインで最も美しいと呼ばれる広場の一つ、バスケス・デ・モリナ広場がある。そこにはレコンキスタの重要な建築物がいくつかある。サクラ・カピージャ・デ・エル・サルバドール教会、現在パラドールであるデアン・オルテガ邸、マルケス・デ・マノエラ邸、ルネサンスのファサードとゴシック様式の回廊があるサンタ・マリア・デ・ロス・レアレス・アルカサレス教会、ルネサンスの噴水、現在は市役所として使われているバスケス・デ・モリナ邸などである。サクラ・カピージャ・デ・エル・サルバドール教会は特に複雑な様式が際

立っている。中に入っていくにつれて、教会に携わった先駆者達に出会うかのようだ。先駆者達とは、カルロス5世の宮廷秘書だったフランシスコ・デ・ロス・コボス、主な設計に携わったディエゴ・デ・シロエ、ルネッサンスの大芸術家、アンドレス・デ・バンデルビラ、現存するイエス・キリストの変容を飾り衝立に装飾したベルゲテ、ファサードと聖具納室の装飾を手がけた石工エステバン・ハメテ、壮大な格子を手がけたフランシスコ・デ・ビジャルパンドなどだ。16世紀の宗教建築の集大成であるこの教会は、当時の権力と名声の象徴であり、現在スペイン・ルネサンスを知るためにはなくてはならない重要な建築物なのである。

この広場を中心に宮殿や教会、修道院などの建築物が点在している。例えば、プラサ・デル・メルカド又はプリメロ・デ・マジョ広場に位置し、>



❁ “ウベダは常にアンダルシアであった。この町の伝統行事、歴史ある手工芸品、美食や市民の個性は決してアンダルシアに対する愛好心を失うことはなかった。”

ルネサンスの素晴らしい格子があるゴシック様式のサン・パブロ教会。神秘主義の詩人がここで息を引き取ったと言われるサン・ミゲル修道院とサン・ファン・デ・ラ・クルス礼拝堂。2つの廊下に囲まれたルネサンスの回廊を持つバロック様式のサンティシマ・トリニダード教会。ルネサンスの格子と正面玄関を持つゴシック様式のサン・ニコラス・デ・パリ教会。ゴシック様式建築でルネサンスの玄関があるサン・ペドロ教会。ウベダの中で最も古い宗教建築物の一つであるサンタ・クララ修道院。サン・ロレンソ教会。紋章やレリーフなどのシンボルを装飾したカステーリャの特徴を持つ塔の家。マルケス・デ・ラ・ランブラ邸などがある。

ウベダにある最も重要なルネサンス建築を構成する建物の一つがアンドレス・デ・バンデルビラのサンティアゴ病院である。現在では展示会場や会議の場として使われている。ハエンの司教であり、ウベダ出身のドン・ディエゴ・デ・ロス・コボスの命を受け造られたこの建物は、レイエ

ス・カトリコス病院をモデルにしたとも言われている。内部には広い回廊と2つの塔に囲まれた素朴な正面ファサードがあり、重要な部屋は素晴らしい中庭に面している。聖具納室同様、階段は壁画で装飾されており、礼拝堂は建物の図面や金網など、優美な装飾が施されている。

しかしながら、ウベダがルネサンス建築を特徴とする町とはいふものの、他の様式が疎かにされたというわけではない。アラビア様式、ゴシック様式、バロック様式等が景観を損なうことなくバランス良く融合し、多様な人種が共存したこの町に素晴らしい建築物を造り上げたのだ。

この町の特徴がイタリア・ルネサンスの町に類似しているとはいえ、ウベダは常にアンダルシアであった。過去においてこの町は他のアンダルシアの都市同様アラブ支配下であったが、この町の伝統行事、歴史ある手工芸品、美食や市民の個性は決してアンダルシアに対する愛好心を失うことはなかった。

❁ アクセス:

バエサはハエン県の中心にあり、カソルラ山脈・セグラ山脈・ビジャス山脈国立公園の近くに位置する。ウベダからは9kmの距離にある。レバンテとアンダルシア西部間を結ぶ要所にあり、鉄道や道路交通網が整っている。ハエン中心部から4

5分、グラナダ又はグラナダ空港から1時間半かかる。

❁ インフォメーション:

www.baeza.es
turismo@baeza.net

観光案内所
Plaza del Pópulo s/n
Tel. 953 77 99 82'

テキスト制作者
ミゲル・マニュエコ

デザイン構成
Kokoro lab

印刷
A&Mグラフィカス

法定納本コード
LE-1951/2009

スペイン世界遺産都市グループ

Palacio de Los Verdugo
Lope Núñez, 4
05001 Ávila

Tel.: +34 920 35 40 00
turismo@ciudadespatrimonio.org



**Ciudades
Patrimonio
de la Humanidad**
ESPAÑA | UNESCO

www.ciudadespatrimonio.org

www.spainheritagecities.com

